

ISSN 2186-5760

# 山陽女子短期大学紀要

第 33 号

2012

BULLETIN  
OF  
SANYO WOMEN'S COLLEGE

No.33

March.2012

---

CONTENTS

*Originals*

<i>Expression of Human Neutrophil Antigens and Neutrophil Phagocytosis in Myelodysplastic Syndrome</i>	
..... <i>Rie Onodera, Kikuyo Taniguchi, Hironori Harada, Masao Kobayashi</i> .....	1
<i>Estimation of Energy Intake from Food Intake Values in Elementary School Children</i>	
..... <i>Masataka Ishinaga and Chieko Teraoka</i> .....	9
<i>Mark Twain's Feeling as a Stranger and His Sympathetic Imagination in Autobiography of Mark Twain Vol.1</i>	
..... <i>Atsuko Mizuno</i> .....	17
<i>A Study on Gakudo-sokai-shosetu (Evacuated Schoolchildren Novels)</i>	
..... <i>Hiroshi MARUKAWA</i> .....	—

# 山陽女子短期大学紀要

第33号

2012年3月

## 目 次

### 原著論文

骨髓異形成症候群MDSにおける好中球抗原HNAの発現と好中球食作用機能	
.....小野寺利恵, 谷口 菊代, 原田 浩徳, 小林正夫.....	1
学童の摂取エネルギーを食事摂取量から推定する	
.....石永 正隆, 寺岡千恵子.....	9
『マーク・トウェイン自伝』(第1巻)におけるストレンジャー意識と共に感	
.....水野 敦子.....	17
学会発表抄録.....	35
研修会報告.....	38
山陽女子短期大学紀要投稿規定.....	41
学童疎開小説論 一疎開文学論ノート③—	
.....丸川 浩.....	—

〈原著論文〉

## 骨髓異形成症候群MDSにおける好中球抗原HNAの発現と 好中球食作用機能

小野寺 利 恵<sup>1)3)</sup>, 谷 口 菊 代<sup>1)3)</sup>, 原 田 浩 徳<sup>2)</sup>, 小 林 正 夫<sup>3)</sup>

1) 山陽女子短期大学臨床検査学科

2) 広島大学放射線医科学研究所ゲノム疾患資料研究部門血液内科

3) 広島大学大学院医歯薬保健学研究院統合健康科学部門小児科

### はじめに

骨髓異形成症候群(Myelodysplastic Syndrome, MDS)は、骨髓機能の異常によって前白血病状態となり、造血障害を起こす症候群である。MDSでは好中球の形態異常が多く見られ、易感染性や好中球機能の低下を伴う。種々の血液疾患で、細胞膜表面抗原の発現が低下し、陰性化する場合がしばしばあり、MDSにおいてもHNA発現に変化がみられることが推測される。本研究ではMDSにおける好中球のHNA発現と食作用機能を調べ、MDSのFAB分類による病型および病態との関連を考察した。

近年、HNA-2aの機能・構造およびHNA-2a遺伝子解析に関する研究が進み、細胞増殖と関連のある遺伝子であることが知られるようになった。MDSのように細胞増殖が低下する疾患、あるいは種々の悪性腫瘍で細胞が異常に増殖する疾患において、HNA-2aの細胞表面マーカー検査やHNA-2a遺伝子検査が診断に有用になる可能性が考えられたため、今回、結果を報告するものである。

### 方法

好中球表面マーカー：ヘパリン添加末梢血の全血50μLと、FITCまたはRPE標識モノクローナル抗体10μLを混合、4°C、30分間反応させた。反応終了後、溶血剤(Lysing Reagent, Ortho Diagnostic Systems Inc, Raritan, NJ)を加え混合、室温10分間で溶血させた。BSA-PBS(0.1% Bovine Serum Albumin, 0.1% NaN<sub>3</sub>添加PBS)で1回洗浄後、BSA-PBSに浮遊させてOrtho Cytron Absolute(Ortho)で測定、解析した。

HNAを検出するために用いたモノクローナル抗体は、IgG<sub>1</sub>(negative control, Becton Dickinson Immunocytometry Systems, San Jose, CA), TAG1(HNA-1a, CD16b), TAG2(HNA-1b, CD16b), TAG3(FcγRIII, CD16a/b), TAG4(HNA-2a, CD177), CD32(FcγRII, Farmingen, San Diego, CA), CD64(FcγRI, Farmingen), CD35(CR1, Immunotech, Marseille, France), CD18(CR3,

CR4, LFA-1 $\beta$ , Becton Dickinson), CD11a(LFA- $\alpha$ , Becton Dickinson), CD11b(CR3, Ortho), CD11c(CR4, Becton Dickinson), CD15(Lewis $x$ , DAKO, Glostrup, Denmark)を使用した。TAG1, TAG2, TAG3 およびTAG4は我々が樹立したMoAbである。

オプソニン化蛍光粒子の貪食：Human IgG(Cappel Research Products, Durhum, NC) 50mgを0.1Mホウ酸ナトリウム-HCl緩衝液(pH8.2) 10mLに溶解した。この液に、蛍光粒子(1-2  $\mu$ m)(Fluoresbrite Carboxylate, Polysciences, Inc, Warrington, PA)  $2 \times 10^9$ 個を加え混合4°C48時間反応させた。グルコースメディウムで洗浄後、グルコースメディウムに再浮遊させ $2 \times 10^7$ /mLに調整して使用した。採血直後のヘパリン添加末梢血の全血100  $\mu$ LとHuman IgG感作蛍光粒子浮遊液100  $\mu$ Lを加え混合、37°CでTime courseをとり（0分間および30分間）反応させた。反応終了後直ちに溶血剤2mLを加え、4°Cで攪拌・溶血させ、Ortho Cytron Absolute (Ortho)で測定、解析した。食作用機能検査に用いる血液は、採血後数時間経つと好中球の食作用機能が低下するため、採血直後の血液のみを対象とした。

## 対象

広島大学原爆放射線医科学研究所血液内科から好中球表面マーカー検査と食作用機能検査を依頼された、MDS患者31人すなわちthe French-American-British (FAB) 分類によるrefractory anemia, RA 17人, refractory anemia with excess of blasts, RAEB 10人, RAEB in transformation, RAEB-t 1人, chronic myelomonocytic leukemia, CMMoL 3人のヘパリン添加末梢血を検査材料とした。患者の主治医によるインフォームドコンセントにより、採血が行われた。

## 結果

好中球表面マーカー：多くのMDS患者の好中球で、HNA-1a, HNA-1b, Fc $\gamma$ RIIbの発現が低下していた(Table 1)。これらのCD16b抗原は健常成人では顆粒球分画の97~98% (好中球分画)が抗原陽性であるが、MDSにおいては全好中球の抗原発現が低下する場合(RA 3人, RAEB 5人, RAEB-t 1人, CMMoL 2人)と、抗原陽性好中球と抗原陰性好中球が混在する2峰性のパターンがみられる場合(Figure 1; RAEB 1人)の、2種類の変化がみられた。また、健常成人においてHNA-2aは種々の発現パターンを示し、抗原陽性好中球と抗原陰性好中球のサブポピュレーションが認められる<sup>1) 2)</sup>(Figure 2)。MDSにおいても同様に種々の発現パターンが認められた。しかし、測定したMDS患者31人のうち、RA1人とRAEB 3人がHNA-2a陰性であり、健常成人の陰性者の頻度が0.5%<sup>2)</sup>であるのと比較して、MDSにおける陰性者の頻度が12.9%と著明に高かった(Table 1)。

オプソニン化蛍光粒子の貪食：健常成人と比較してRAで2人、RAEBで2人、RAEB-tで1人が健常成人よりも貪食能が低下していた(Table 1)。

Table 1. Expression of neutrophil antigens and neutrophil phagocytosis MFI; mean fluorescence intensity.

\	HNA-1 type	HNA-1a/1b	HNA-2a	Lewis <sup>x</sup>	LFA-1 $\alpha$	Fc $\gamma$ RII	Fc $\gamma$ RI	CR1	CR3,CR4	CR3,Mac-1	CR4,p150,95	Phago	
		expression	expression	CD15	CD11a	CD32	CD64	CD35	CD18	CD11b	CD11c	30min	
		MFI	MFI(%)	MFI	MFI	MFI	MFI	MFI	MFI	MFI	MFI	%	
Healthy Adults	HNA-1a n = 7	152.3	(2+:n=3) (3+:n=7) (4+:n=1)	136.1 (2+:n=3) (3+:n=7) (4+:n=1)	190.9	97.0	148.7	53.9	83.8	131.2	130.5	73.1	51.6
	HNA-1b n = 6	137.7											
	Fc $\gamma$ RIII n = 11	153.7											
MDS RA	1 1a/1a		3+										nt
	2 1a/1a		3+										nt
	3 1a/1a		4+					↑		↑	↑	↑	nt
	4 1a/1a		4+				↓	↑					nt
	5 1a/1a		4+										nt
	6 1a/1a		w+					↑		nt			nt
	7 1a/1b		4+										32.5 ↓
	8 1a/1b		4+				↑						nt
	9 1a/1b		4+										nt
	10 1a/1b		—					↑					26.0 ↓
	11 1a/1b		3+										nt
	12 1a/1b		3+					↑			↑		nt
	13 1a/1b	1b ↓	2+					↑	↑	↑	↑	↑	nt
	14 1a/1b		4+		nt		↓						40.4
	15 1a/1b	1b ↓	3+		↓ *			↑		nt			nt
	16 1b/1b		4+										nt
	17 1b/1b	1b ↓	3+					↑		nt			nt
MDS RAEB	18 1a/1a	Fc $\gamma$ RIII ↓	—					↑	↑				46.6
	19 1a/1a	Fc $\gamma$ RIII ↓	2+				↓	↑		↑			62.9
	20 1a/1a		w+							↑			nt
	21 1a/1a	1a ↓ * Fc $\gamma$ RIII ↓ *	3+	↓ *	↓	*	↑ *	↑	nt	↑	↑		nt
	22 1a/1b	—	↓	nt		↑				↑	nt		60.9
	23 1a/1b		3+			↓	↑						29.9 ↓
	24 1a/1b	Fc $\gamma$ RIII ↓	—				↑						32.5 ↓
	25 1a/1b		3+				↑	↑	nt	↑	↑		nt
	26 1a/1b	1b ↓	4+				↑		nt				nt
	27 1b/1b	Fc $\gamma$ RIII ↓	4+		nt		↓						40.4
MDS RAEB-t	28 1b/1b	1b ↓	2+	↓		↓	↑	↑	↑				26.8 ↓
MDS CMMoL	29 1a/1a		w+	↓			↑			↑			50.3
	30 1a/1b	1b ↓	3+			↓	↑	↑	↑				69.7
	31 1a/1b	1b ↓	3+	↓			↑	↑	↑				44.6
Datum Points	1a•FcR ↓ :<130	1b ↓ :<120		↓ :<170	↓ :<80	↓ :<130	↑ :>70	↑ :>100	↑ :>140	↑ :>150	↑ :>110	↓ :<40%	

\*We observed double peaks in flowcytometric analysis. nt ; not tested. Phago ; Phagocytosis.

HNA-2a expression (%) was represented as follows:negative:&lt;5%, w+:5%-20%, 1+21%-40% -40%, 2+41%-60%, 3+:61%-80%, 4+:≥81%~.

↓ ; the MFI value in the patient was smaller than the average of MFI values in healthy adults.

↑ ; the MFI value in the patient was larger than the average of MFI values in healthy adults.

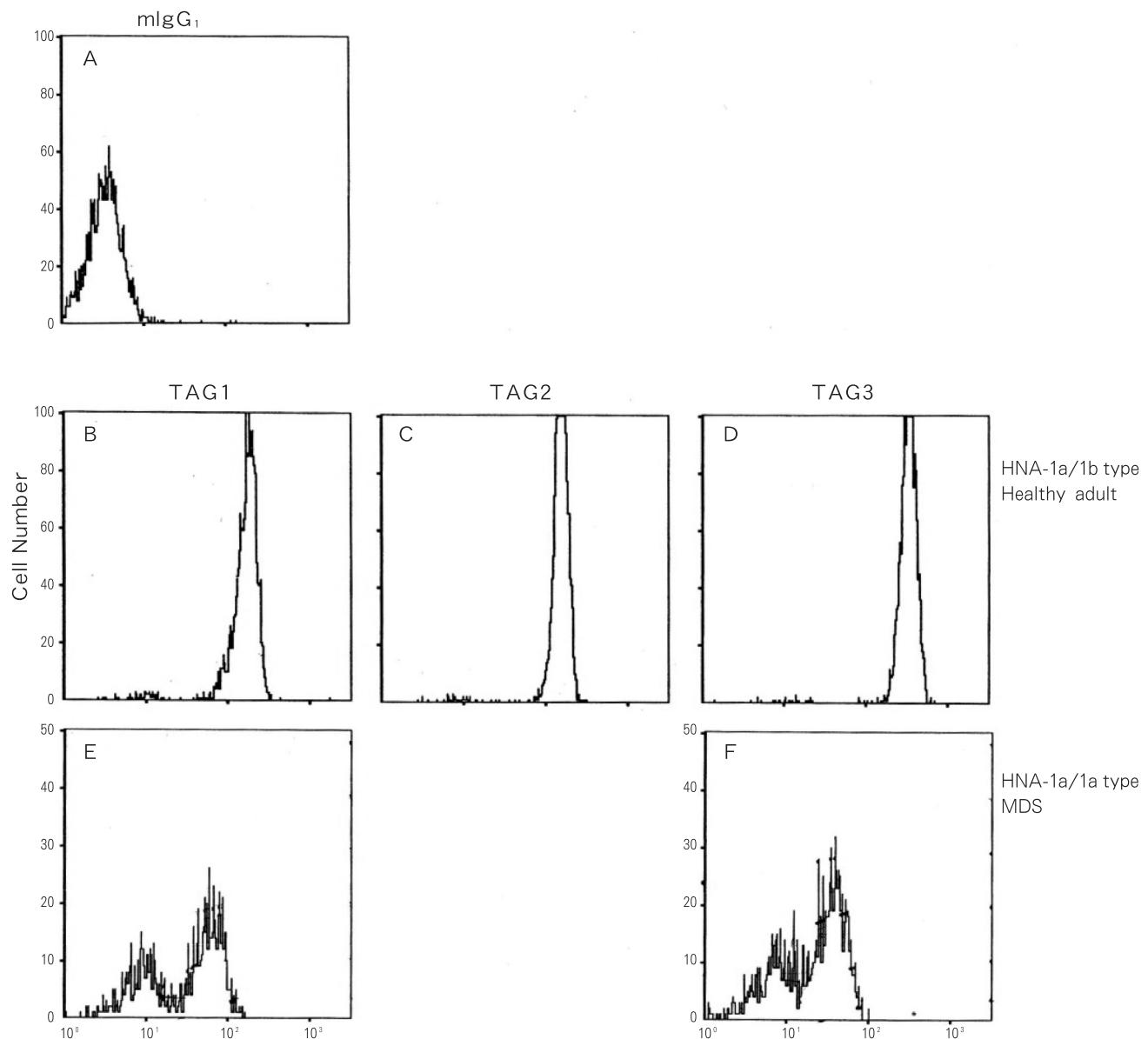


Fig.1 Flow cytometric analysis of human neutrophil antigen, HNA-1a/1b and Fc $\gamma$ R IIIb

Negative expression of HNA-1a/1b or Fc $\gamma$ R IIIb was assayed using a mouse IgG<sub>1</sub> isotype control (A). Expressions of HNA-1a (B), HNA-1b (C) or Fc $\gamma$ R IIIb (D) were assayed using MoAbs, TAG 1, TAG 2 or TAG3, respectively, in one healthy adult (HNA-1a/1b type). Expression of HNA-1a (E) and Fc $\gamma$ R IIIb (F) were assayed using MoAbs and TAG1 or TAG3, respectively, in MDS RAEB (Patient No.21, HNA-1a/1a type).

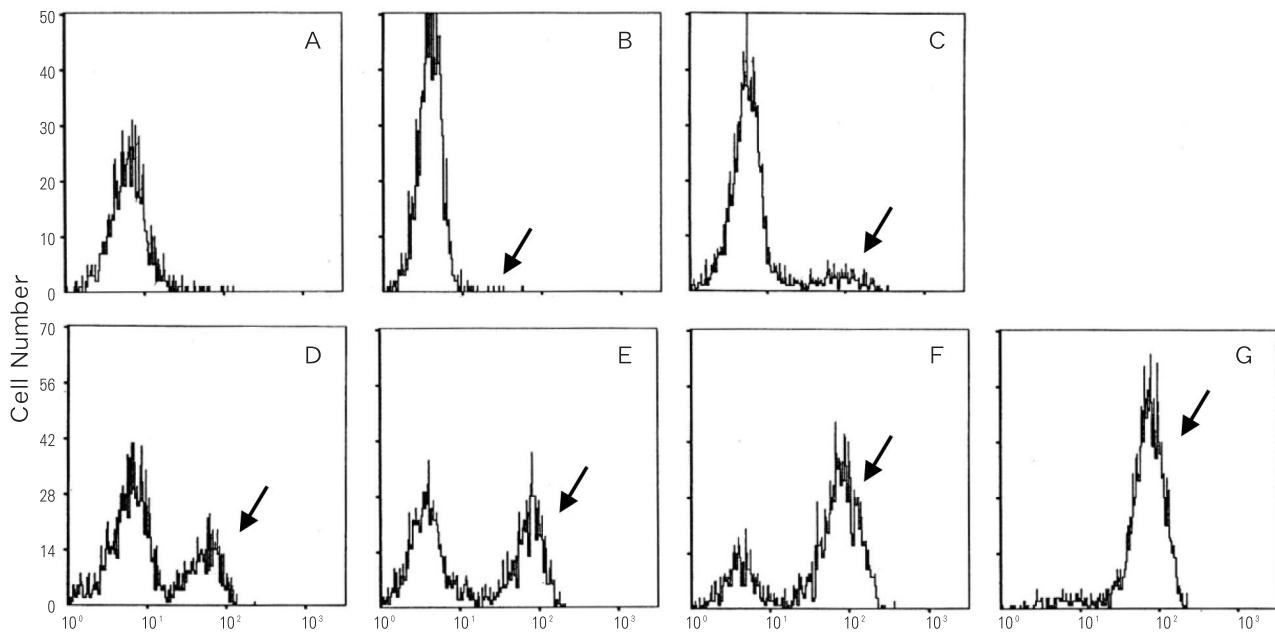


Fig.2 Flow cytometric analysis of human neutrophil antigen, HNA-2a

Negative expression of HNA-2a was assayed using a mouse IgG<sub>1</sub> isotype control (A).

Arrows show the expressions of HNA-2a, negative (B, - : <5%), weakly positive (C, w+ : 5%-20%) or positive (D, 1+ : 21%-40%, E, 2+ : 41%-60%, F, 3+ : 61%-80%, G, 4+ : ≥81%) assayed using TAG4 MoAb.

### 考察

好中球表面マーカー：Fc $\gamma$  IIIb上のHNA-1a, 1b (CD16b関連抗原)と, HNA-2a (CD177) は異なる抗原系である。また, いずれの抗原もglycosyl-phosphatidylinositol (GPI) で好中球細胞膜に結合している抗原である<sup>3)4)</sup>。いずれか一方の抗原発現量低下しかみられない場合も多かったので, これらの発現量低下は, PNH (発作性夜間ヘモグロビン尿症) 患者のようなGPI欠損によるものだけではないと考えられた。おそらく, 遺伝子の欠損や転写障害など何らかの異常によって, 抗原発現が低下した場合もあると推測された。また, 全好中球に抗原量の低下がみられる場合と, 発現の無い陰性好中球と, 発現量が低下しているが抗原陽性の好中球が見られる, いわゆる2峰性の発現を示す2種類の変化が認められた。抗原の発現低下には複数の機序が存在すると考えられた。

健常成人のHNA-2a陰性者と弱陽性者(w+)の頻度はそれぞれ0.5%, 0.7%であるのに対して, MDSにおいては HNA-2a陰性者が31人中4人(RA 1人, RAEB 3人, 12.9%), 弱陽性者が31人中3人(RA 1人, RAEB 1人, CMMoL 1人, 9.7%)と多く, 陰性者3人がRAEBであったことから, 病型とHNA-2a陰性化とは関連があり, 病態の悪化に伴いHNA-2aが陰性化する可能性があると考えられた。多血症や妊娠では発現の増加が認められることから, HNA-2aは細胞の増殖と関連があると考えられており<sup>5)6)7)8)</sup>, MDSのような造血機能低下によって細胞数が減少する疾患では, HNA-2a遺伝子の欠損や突然変異あるいは転写異常などが起こった可能性が推測された。近年, 健常成人におけるHNA-2a陰性者のHNA-2a遺伝子解析<sup>9)10)</sup>が進んでおり, 今後, HNA-2a遺伝子解

析はMDSの診断に有用になる可能性がある。

オプソニン化蛍光粒子の貪食：13人について好中球の貪食能を検査した結果、5人の患者好中球で貪食能が低下していた。しかし、各抗原の発現低下との関連は明確ではなかった。好中球の貪食能に関する研究で、HNA-1a, 1b, Fc $\gamma$ IIIbは免疫食作用に、HNA-2aは自然食作用に関与していることを報告した<sup>11)</sup>。しかし、貪食は複数の細胞膜抗原が補い合っておこると考えられるため<sup>11)</sup>、抗原発現が低下しているMDS患者の好中球においても、他の抗原によって貪食は正常に行われる場合があると考えられた。免疫食作用に関与するIgG Fc部に親和性の高いFc $\gamma$ R Iの発現が多く、患者好中球で高まっており、Fc $\gamma$ R IIとFc $\gamma$ R IIIの発現低下を補っている可能性が考えられた。Fc $\gamma$ R Iは活性化好中球で発現が高まっていることが知られている。また、CR1, CR3, CR4などの補体レセプターの発現も高まっており、減少した好中球が個々に活性化することで、数的的原因による機能低下を補っていることが推測された。しかし、貪食能の低下がみられた患者の好中球では、今回測定した抗原以外の抗原の発現異常も起こっている可能性が推測された。おそらく、MDS患者にみられる易感染性は、好中球減少に加えて、個々の好中球の食作用機能低下によるものと考えられた。

## 要約

1. 本研究ではMDSにおける好中球のHNA発現と食作用機能を調べ、MDSのFAB分類による病型および病態との関連を考察した。
2. MDSではCD15やCD11aの接着分子や、HNA-1a, HNA-1b, Fc $\gamma$ R IIIb, Fc $\gamma$ R IIのIgGレセプターが減少している患者がみられ、好中球機能の低下が推測された。しかし、Fc $\gamma$ R Iと補体レセプターCR1, CR3, CR4の発現は高まっている傾向がみられ、好中球数は少ないが、個々の好中球は活性化していると考えられた。

MDS患者にみられる易感染性は、好中球減少と好中球食作用機能低下によるものと考えられた。

3. MDS患者のHNA-2a陰性者の頻度が著明に高く、陰性者3人がRAEBであったことから、病型および病態の悪化とHNA-2a陰性化とは関連があると考えられた。

近年、HNA-2aの機能・構造およびHNA-2a遺伝子解析に関する研究が進み、細胞増殖と関連のある遺伝子であることが知られるようになった。MDSのように細胞増殖が低下する疾患、あるいは種々の悪性腫瘍で細胞が異常に増殖する疾患において、HNA-2aの細胞表面マーカー検査やHNA-2a遺伝子検査が診断に有用になる可能性が考えられた。

### 謝辞

健常成人血液を提供して頂いた広島大学医歯薬学総合研究科小児科学・広島大学病院輸血部教職員の皆様に深く御礼申し上げます。

### 引用文献

- 1) Stroncek DF, Skubitz KM, McCullough JJ. (1990) Biochemical characterization of the neutrophil-specific antigen NB1. *Blood* 75:744-55.
- 2) Taniguchi K, Kobayashi M, Harada H, et al. (2002) Human neutrophil antigen-2a expression on neutrophils from healthy adults in western Japan. *Transfusion* 42:651-657.
- 3) Scallan BJ, Scigliano E, Freedman VH, et al. (1989) A human immunoglobulin G receptor exists in both polypeptide-anchored and phosphatidylinositol-glycan-anchored forms. *Immunology* 86:5079-5083.
- 4) Stroncek DF, Shankar RA, Herr GP. (1993) Quinine-dependent antibodies to neutrophils react with a 60-Kd glycoprotein on which neutrophil-specific antigen NB1 is located and an 85-Kd glycosyl-phosphatidylinositol-linked N-glycosylated plasma membrane glycoprotein. *Blood* 81:2758-2766.
- 5) Bettinotti MP, Olsen A, Stroncek DF. The use of bioinformatics to identify the genomic structure of the gene that encodes neutrophil antigen NB1, CD177. (2002) *Clin Immunol* 102:138-44.
- 6) Caruccio L, Bettinotti MP, Matsuo K, et al. (2003) Expression of human neutrophil antigen-2a (NB1) is increased in pregnancy. *Transfusion* 43:357-63.
- 7) Taniguchi K, Nagata H, Katsuki T, et al. (2003) Significance of human neutrophil antigen-2a (NB1) expression and neutrophil number in pregnancy. *Transfusion* 44;581-585.
- 8) Gohring K, Wolff J, Doppl W, et al. (2004) Neutrophil CD177 (NB1 gp, HNA-2a) expression is increased in severe bacterial infections and polycythemia vera. *Br j Haematol.* 126(2):252-4.
- 9) Kissel K, Santoso S, Hofmann C, et al. (1999) Elucidation of the primary structure of the neutrophil antigen HNA-2a (NB1): evidence for a new glycoprotein (abstract). *Blood* 94:430a.
- 10) Kissel K, Sheffler S, Kerowgan M, Bux J. (2002) Molecular basis of NB1 (HNA-2a, CD177) deficiency. *Blood* 99:4231-3.
- 11) 谷口菊代, 兼安千晴, 岡村美和, 小林正夫 (2007) ヒト好中球抗原Human Neutrophil Antigen (HNA) -1a/1b, および2aに対するモノクローナル抗体の, 食作用に与える影響. 臨床病理 第55巻 第11号 996-1001.

Expression of Human Neutrophil Antigens and Neutrophil Phagocytosis in  
Myelodysplastic Syndrome

Rie Onodera, Kikuyo Taniguchi, Hironori Harada, Masao Kobayashi

School of Medical Technology, Sanyo Women's College

Summary

Myelodysplastic syndrome (MDS) involves blood dyscrasia caused by bone marrow failure, and patients with MDS are considered to be in a preleukemic state. Mutation in nuclear forms and cytoplasma of neutrophils, a decrease in neutrophil number and neutrophil dysfunction are seen in many patients with MDS.

Here, we tested neutrophil membrane and phagocytosis markers to elucidate the relations between MDS types, i.e., refractory anemia (RA), refractory anemia with excess of blasts (RAEB), RAEB in transformation (RAEB-t), and chronic myelomonocytic leukemia (CMMol), according to the French-American-British (FAB) classification.

We observed a decrease in the expression of phagocytosis markers CD15, CD11a, HNA-1a, HNA-1b, Fc $\gamma$ RIIb, and Fc $\gamma$ RII. We also observed an increase in the expression of activation markers Fc $\gamma$ RI, CR1, CR3, and CR4. These results indicated that although neutrophil phagocytosis was decreased, the neutrophils were activated in MDS. Therefore, the liability to infectious disease seen in MDS may be caused by the decreases in neutrophil number and expression of neutrophil phagocytosis markers, while the increase in expression of activation markers may be in compensation for the decrease in phagocytosis.

The frequency of the HNA-2a-negative population was significantly higher in MDS (12.9%) than in healthy adults (0.5%). These results suggested a relationship between MDS type and the expression of HNA-2a, a gene related to cell proliferation.

〈研究ノート〉

## 学童の摂取エネルギーを食事摂取量から推定する

石 永 正 隆, 寺 岡 千恵子

食物栄養学科

生活習慣病のリスクファクターである小児肥満の出現率は、ここ数年やや低下傾向にあるがそれでも2011年では約9%である<sup>1)</sup>。肥満はメタボリックシンドロームの主要な要因であるが、思春期に肥満である子どもの約70%は成人になってからも肥満になると言われている<sup>2)</sup>。外国の例ではあるが、大規模なコホート研究において、子どもの肥満は大人になってから冠動脈心疾患を増加させ、罹患率と死亡率が増加することが明らかにされている<sup>3)</sup>。

小児期の生活活動量の低下と過食の両方が肥満に関与していること言われている<sup>4) 5)</sup>。生活活動量の低下は運動不足あるいは基礎体力や運動能力の低下として実測され<sup>6)</sup>、実体験として認知できる。しかしながら、過食かエネルギー過多かどうかを体験的に認知するのは困難である（肥満の増加はそのことを如実に物語っている）。1日に何をどれだけ食べたかをきちんと覚えて、栄養価計算をしてエネルギー過多かどうかを判断するのも一般的には難しい。最近は栄養価計算機能がついたパソコンやスマートフォンがあるが、それでもある程度知識が必要となってくる。一方、堀越らは、体位と手のひらが高い相関性があることから、手のひらを用いて、その人にあった食品群別摂取目安量を求める方法を考案した<sup>7)</sup>。調理する者にとっては目安量を知って料理するので良い方法だと思われる。しかしながら、これをを利用して、手軽にエネルギー過多かどうかを判断するには煩雑になるのでそう簡便では無い。大雑把でも構わないのでエネルギー過多かどうかを日常的に簡便に知ることができる方法を探ることも大事だと思われる。

我々は、小学生を対象に健康教室を開き、参加した141名の児童から1日分の食事を陰膳方式で集め、栄養成分や脂質の成分について分析し、その結果を報告してきた<sup>8)~12)</sup>。今回、再度データを検討する中で、食事摂取量と摂取エネルギー間にかなり高い相関性があり、回帰直線を用いて食事摂取量から摂取カロリーを簡便に推測できることがわかった。

児童からの陰膳方式による1日分の食事の収集方法（特にお茶や水も摂取した場合は、それらも提供してもらい、魚の骨や根っこなど可食しなかった物は提供しない等、実際に即した形での提供をお願いした。）及び食事の栄養成分の分析方法の詳細については既に報告している<sup>8), 11)</sup>。簡単に記すと、広島県下7保健所から健康教室(1回目)に参加した児童79名(1999年)、及び2000–2002年M保健所で行った健康教室(2回目)に参加した児童62名であった。参加人数および肥満傾向児の

Table 1. Age and sex of school children attending the health class\*

Age(years)	6	7	8	9	10	11	12	Total
Sex								
Girls	2	15	7	16	18	19	6	83
Boys	3	10	12	17	8	6	2	58
Total	5	25	19	33	26	25	8	141

\* Elementary school children attending a health class at public health center.

Table 2. Number of obese and non-obese children\*

	Girls	Boys	Total
Non-obese	59	44	103
Obese	24	14	38
Total	83	58	141

\* Obese=[weight-standard weight]/standard weight×100>20. The standard weight was determined from "Table 1" evaluated by Japanese Society of Scholl Health<sup>14)</sup>

数はTable 1とTable 2に示した。対照群は健康教室が開催されなかった地域の児童21名であった。陰膳方式で集めたこれら児童の食事中のたんぱく質、水分、脂質、糖質及び灰分含量は平成8年5月の厚生省通達衛新第47号「栄養表示基準の導入に伴う栄養成分等の分析方法等について」に従つて求めた。エネルギー(kcal)は、タンパク質、脂質及び炭水化物量にそれぞれエネルギー換算係数4, 9, 及び4を乗じて簡易的な値を求めた。

栄養成分等について、男児と女児および肥満傾向児と非肥満傾向児のそれぞれ2グループ間の差の検定(Mann-WhitneyのU検定)等統計処理はStatView5.0<sup>TM</sup>を用いて行った。ただし、2グループ間の回帰直線の傾き及び切片の有意差検定は「バイオサイエンスの統計学」によった<sup>13)</sup>。なお、既に報告した研究は、全てヘルシンキ宣言の精神に則り、飲食物提供者(児童の保護者)の同意を得て行われたものである<sup>8), 11)</sup>。

Table 2には平成17年に改訂された肥満度判定基準<sup>14)</sup>に基づいて肥満傾向児と非肥満傾向児の男女別的人数を示した。既に報告したように最初の健康教室は肥満傾向児の児童を中心とした健康教室だったので<sup>8)-11)</sup>、当然ながら1回目では、参加者に占める肥満傾向児の割合は多かった。2回目の3年間の健康教室では、参加を広く児童に呼びかけたものであった。Table 3は栄養成分の摂取量や食事摂取量の各グループ間の比較を行ったものである。非肥満傾向児群と肥満傾向児群では、全ての項目で肥満傾向児群の摂取量が有意に高かった(P<0.05)。過体重の児童はよく食べるということを示している。これまでの報告では、実測値ではなく、食事調査から算出した数値では両者に差が見られていない<sup>15), 16)</sup>。陰膳方式による実測値が現実を反映しているのかもしれない。肥満傾向児群では、糖質と水分含量が多いことから、石井らが報告しているように清涼飲料水の摂取量が多いことが推測される<sup>17), 18)</sup>。一方、女児と男児間では全ての項目で有意差はみられなかっ

Table 3. Daily intake of nutrient, food and energy in each group.

	Food(g)	Energy(kcal)	Protein(g)	Carbohydrate(g)	Ash(g)
Non-obese	1674.7±448.2	15913±418.9	54.9±17.9	234.9±69.3	11.8±3.8
Obese	2007.5±527.9*	1841.5±437.3	66.1±18.2	269.8±71.6	14.6±4.3
Girls	1741.0±513.7	1607.3±419.8	55.7±17.7	238.2±68.6	12.5±4.2
Boys	1797.9±461.2	1732.4±453.6	61.0±19.5	253.0±74.9	12.7±4.1

Values are means±standard deviation.

\*These values are significantly different( $P<0.05$ ).

Table 4. Regression parameters for each group

	Slope	Intercept(kcal)
Non-obese	0.691±0.06*	434.6±107.9*
Obese	0.662±0.08	511.3±176.6
Girls	0.644±0.06	485.9±107.2
Boys	0.752±0.09	380.8±157.2

\*Values are means±standard error.

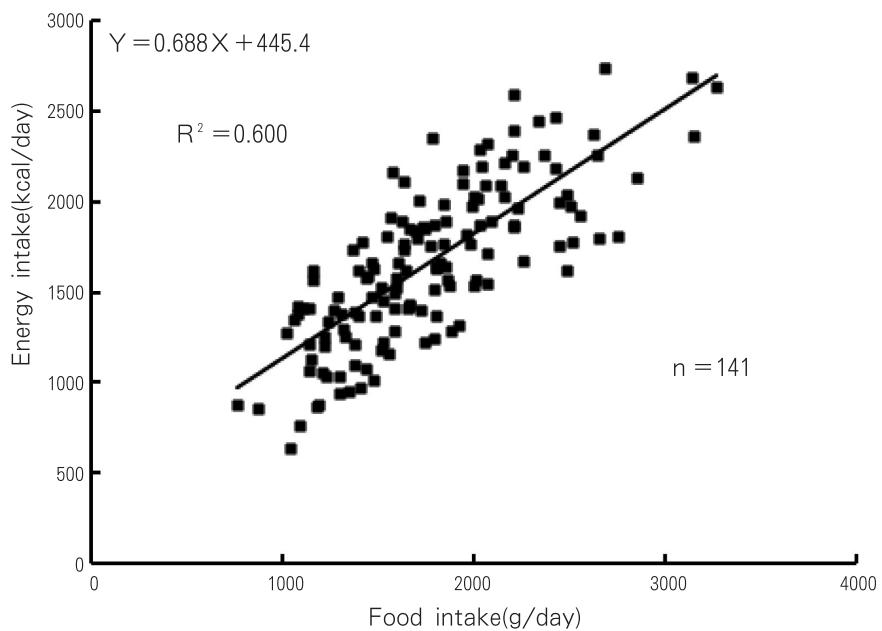
There are no significant differences in slope and intercept between the non-obese and obese groups, or girls and boys( $P<0.05$ ).

た( $P>0.05$ )。これは、男児の場合7から9歳が多く、女児では9から11歳が多いことによると推測された(Table 1)。

子どもの食物の過剰摂取をコントロールするためには、大まかにどれくらいのエネルギー(kcal)を摂取しているかを把握することは大切である。しかしながら、栄養価計算を料理の都度に行なうことは大変な作業となるので、そのためにはなるべく簡便な方法で知ることができるのがよい。従って、食べた量から目安のカロリーを知ることができればかなり簡便になる。健康教室に参加した児童141名を対象に食物摂取量とエネルギー摂取量の関係を調べた。それぞれのグループの相関係数rと決定係数R<sup>2</sup>値は、男児群では(r = 0.764, R<sup>2</sup> = 0.584), 女児群では(r = 0.788, R<sup>2</sup> = 0.621), また肥満傾向児群では(r = 0.800, R<sup>2</sup> = 0.640), 非肥満傾向児群では(r = 0.739, R<sup>2</sup> = 0.546)であり、全児童では(r = 0.774, R<sup>2</sup> = 0.600)であった。いずれの場合も相関係数が7以上と高い相関性( $P<0.01$ )があった。それ故、男児と女児および肥満傾向児群と非肥満傾向児群の回帰直線の傾きおよび切片に有意な差があるのかないのか検定を行った。それぞれの2グループ間に有意な差がなければ、全ての児童に対して1つの回帰式を使う事ができるので便利である。それぞれの回帰直線のパラメーターをTable 4に示した。肥満傾向児群と非肥満傾向児群、及び男児群と女児群において、それぞれ2グループ間の回帰直線の傾きと切片に有意差が無いことが解った。従って、健康教室に参加した全児童を対象に回帰直線を作成した(Figure)。回帰直線の式はY = 0.688X + 445.4 (Yは摂取エネルギーkcal, Xは食物摂取量g) である。

次に回帰式の妥当性を検証するために、健康教室に参加していない児童21人について、食物摂取量

学童の摂取エネルギーを食事摂取量から推定する



Relation between food intake and energy

Table 5. Comparison of the predicted values(kcal) obtained from the linear regression model with measured values and estimated values from a conventional formula.

Sex <sup>1)</sup>	Food intake (g)	Measurement (A)	Predicted values (B)	Estimation from conventional formula <sup>2)</sup> (C)	Ratio 1 (B/A×100)	Ratio 2 (C/A×100)
girl	1360	1198	1381	1452	115	121
boy	1770	1251	1663	1739	133	139
boy	3610	3336	2928	3027	88	91
girl	1900	1564	1752	1830	112	117
girl	1700	1720	1614	1690	94	98
boy	1490	1631	1470	1543	90	95
girl	1810	1923	1690	1767	88	92
boy	1740	1310	1642	1718	125	131
girl	1680	1269	1601	1676	126	132
boy <sup>3)</sup>	1610	1936	1553	1627	80	84
girl	1010	1005	1140	1207	113	120
boy	1850	1727	1718	1795	99	104
boy	2320	2197	2041	2124	93	97
girl <sup>3)</sup>	1460	1546	1449	1522	94	98
boy	3070	2477	2557	2649	103	107
girl	1130	1109	1222	1291	110	116
boy	1680	1875	1601	1676	85	89
boy	1470	1602	1456	1529	91	95
girl	1430	1361	1429	1501	105	110
girl	1760	1538	1656	1732	108	113
boy	3150	2624	2612	2705	100	103
average±standard deviation					103±15	107±15

1) School children not attending the health class.

2) Values were calculated using the formula  $Y(\text{energy intake, kcal})=0.7 \times X(\text{food intake, g})+500$

3) Obese individuals

からエネルギー摂取量を予測し, 実測値と比較した(Table 5: Measurement and Predicted value)。21名の予測値の平均は実測値の平均の $103 \pm 15\%$ であり, 対応のあるt検定でも両者に差が見られなかった。従って, 我々の回帰式の妥当性は検証されたものと考える。更に覚えやすいように, もう少し式を簡略化して $Y = 0.7X + 500$ として予測値を算出した(Table 5: Estimation from convenient equation)。推定値の平均は実測値の平均の $107 \pm 15\%$ であり, データとして示していないが, 全ての予測値は予測値上限値と下限値の間にあった。また, 21名中3名(15%相当)が30-40%過剰に見積もっていたに過ぎなかつたので, 大凡の値を知るには十分であろう。

「日本人の食事摂取基準2010」では<sup>19)</sup>, 初めて学童期に身体活動レベルI(低い)が設けられ, 身体活動レベルII(ふつう)については, 2005年版<sup>20)</sup>より身体活動レベルの代表値が低くなつて, 推定エネルギー必要量も低くなつた。すなわち, 小学校1-2年生, 3-4年生, 5-6年生の女児および男児において, それぞれ1450および1650kcal, 1800および1950kcal, 2150および2300kcalである。子どもの生活活動等については今後も検討され, 推定エネルギー必要量も増減するものと思われる。

本論文で提案した簡易式 ( $Y = 0.7X + 500$ ; Y:摂取エネルギーkcal/日, X:食物摂取量g/日)は, 子どもの食事摂取量から摂取エネルギーを推定できるため, 学校における身体検査等で過体重を指摘された場合に, 子どもの現状が過食かどうか, 推定エネルギー量の増減に関わらず判断できるため, 保護者が子どもの現状を判断するのに有用である。

## 文 献

- 1) 平成23年度学校保健統計調査速報, 2 調査結果の概要 (2011) 文部科学省.  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2011/12/08/1313691\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2011/12/08/1313691_3.pdf)
- 2) 三浦克之, 中川秀昭 (2006) 小児肥満と成人肥満の関係は. 小児内科 38:1535-1538.
- 3) Baker JL, Olsen LW & Sorensen TA. (2007) Children body-mass index and the risk of coronary heart disease in adulthood. *New Engl J Med* 357:2329-2337.
- 4) 岡田知雄, 大国真彦, 梁茂雄 (1991) 小児の成人病. 小児保健研究 50:333-341.
- 5) 南里清一郎, 米山浩志, 井出義願 (1997) 小児肥満の長期予後. 小児内科29:44-48.
- 6) 長嶋正賓 (1999) 主に発育期からみて. 小児科臨床 52:1328-1333.
- 7) 堀越昌子, 松宮孝明, 中村博美 (1992) 手のひらを用いた食品群別摂取目安量一手の大きさと体位の関係—. 滋賀大学教育学部紀要 自然科学・教育科学 42:15-27.
- 8) 石永正隆, 望月てる代, 上田愛子, 市 育代, 七枝美香, 小田光子, 岸田典子 (2001) 肥満児と非肥満児における脂肪酸, コレステロール及び植物ステロールの1日摂取. 日本栄養食糧学会誌54:291-296.

- 9) 広島県三原保健所 (2001) 平成12年度小児生活習慣病予防対策事業報告書. 安武 繁(代表)  
広島県三原保健所, 三原.
- 10) 望月てる代, 上田愛子, 岸田典子, 石永正隆 (2002) 学童期におけるフラボノイドの1日摂取量の実測値. 日本栄養食糧学会誌 55:269-273.
- 11) 石永正隆, 上田愛子, 望月てる代 (2003) 健康教室に参加した小学生の栄養成分の1日摂取量の実測値－肥満児と非肥満児の比較－. 家政学研究 49:88-92.
- 12) Ishinaga M, Ueda A, Mochizuki T, Sugiyama S & Kobayashi T. (2005) Cholesterol Intakes Associated with Lecithin Intake in Japanese People. *J Nutr* 135:1451-1455.
- 13) 市原清志 (1990) 7章「回帰と相間」. バイオサイエンスの統計学, pp.203-259. 南江堂, 東京.
- 14) 財団法人日本学校保健会(2006) 「児童・生徒の健康診断マニュアル (改訂版)」財団法人日本学校保健会, 東京.
- 15) 藤澤由美子, 石井莊子, 山本真弓, 坂本元子 (1993) 小学生における成人病症候の発現状況と食生活の要因. 和洋女子大学紀要 33 (家政系編) : 55-64.
- 16) 吹野洋子, 大石邦枝, 近藤園子, 蒔田和子, 秋定千英美 (1997) 富士市学童の栄養摂取状況, 生活活動及び血液性状に関する研究. 栄養学雑誌 55:119-128.
- 17) 石井莊子, 藤澤由美子, 山本真弓, 坂本元子 (1993) 小中学生の成人病症候出現と食生活の変貌. 和洋女子大学紀要33:73-82.
- 18) 石井莊子, 坂本元子, 山岡和枝, 丹後俊郎 (1996) 小児期の肥満度、コレステロール値の変化および異常値出現に関する食事性因子の検討—5歳からの追跡調査—. 小児保健研究 55: 22-30.
- 19) 厚生労働省 (2009) 日本人の食事摂取基準(2010年版) : 「日本人の食事摂取基準」策定検討委員会報告書. 第一出版, 東京.
- 20) 厚生労働省 (2004) 日本人の食事摂取基準(2005年版) : 日本人の栄養所要量—食事摂取基準—策定検討委員会報告書. 第一出版, 東京.

Estimation of Energy Intake from Food Intake Values in Elementary School Children

Masataka Ishinaga and Chieko Teraoka

Department of Food and Nutrition

Summary

The daily intake of nutrients by 141 school children attending a health class (58 males and 83 females; 38 obese and 103 non-obese) were measured directly by the duplication method. There was a positive correlation between food intake and energy intake in all female, male, obese and non-obese groups. The slope and intercept of the linear regression lines did not differ between males and females or between the obese and non-obese groups ( $P > 0.05$ ). The following linear regression formula was obtained using data from all of the children:  $Y$  (energy intake, kcal) =  $0.688X$  (food intake, g) + 445.4. Using this equation, the energy intake of school children not attending the health class was predicted from their food intake values. In 18 of 21 children, the predicted values were within  $100\% \pm 20\%$  of the measured values. When the formula was simplified to the  $Y = 0.7X + 500$ , the predicted values remained within  $100\% \pm 20\%$  of the measured values. Therefore, our proposed a simplified formula may be very useful for estimating energy intake from food intake values.



〈原著論文〉

## 『マーク・トウェイン自伝』(第1巻)における ストレンジャー意識と共感

水野 敦子

人間生活学科

### 1. マーク・トウェインと『自伝』

没後100年目に出版することというマーク・トウェイン(Mark Twain 1835-1910)の遺言通り、2010年11月カリフォルニア大学より出版された『マーク・トウェイン自伝』(第1巻) (*Autobiography of Mark Twain Vol. 1*, 以下『自伝』(第1巻)と略記)は、文芸書としては異例のベストセラーとなり大きな話題を呼んだ。これから第3巻まで出版されるが、編集主幹のハリエット・E・スミス(Harriet E. Smith)によれば、初公開の原稿は、「第1巻では、口述筆記の5%くらいしかない」が、「第2巻、第3巻では600頁にも及ぶ」(*The New York Times*)という。これらの巻では、晩年の関係がとりざたされる女性秘書イザベル・ライオン(Isabel Lyon)について語られると予告され関心を集めている。

トウェインが『自伝』を執筆した期間は、1870年から死の前年1909年までの39年間にも及ぶ。完全版序文によると、1870年から1905年までの間に断片的に執筆し放置されていた草稿を、1906年1月から、後にトウェインが文学的遺産管理人に指名することになるアルバート・ビゲロー・ペイン(Albert Bigelow Paine)らを相手に口述筆記を始め、1909年12月24日三女ジーン(Jean)が癲癇の発作で悲劇的死を迎えた日に自伝を語り終えたという<sup>1</sup>。『自伝』執筆を開始した1870年は、前年発表した『赤毛布外遊記』(*Innocents Abroad*)が大評判になり、西部の荒くれ男が東部上流階級の令嬢オリヴィア・ラングドン(Olivia Langdon)と結婚した人生の絶頂期であった。一方、『自伝』執筆の筆を擱いた1909年は、最愛の妻と長女スージー(Susie)は既になく、今まで三女ジーンの死に立ち会い、次女クララ(Clara)は結婚してヨーロッパに渡るというまさに孤独と悲嘆のなかにあった。ユーモア作家として颯爽と文壇に登場してからペシミズムに沈んだ晩年に至るまで、波瀾的人生のなかでトウェインは『自伝』執筆に強い意欲を持ち続け、半生をかけたのである。

こうしたトウェインの自伝への強い意欲について、ロン・パワーズ(Ron Powers)は、自分の国の声を発見し、世界の中で「アメリカのシェイクスピア」となった「トウェインの偉業が自らの自伝執筆に向わせた」(6)と言う。トウェインは、「この自伝で私は墓の中から語るという事実を忘れないようにしよう」という有名な言葉を残しているが、この言葉はマイケル・J・キスキス

(Michael J. Kiskis)も指摘するように、「死者の自由な語りをすると自らに確信させようとしているが、『墓から』でさえ全く自由に語ることはできないということをクレメンズは知っていた」(xxxiv)のである。キスキスは、日課となった口述筆記後のビリヤードでトウェインから多くの価値あることを知ることができたというペインの言葉から、トウェインの自伝の語りには、「入念に計画され実行された戦略があり、取り乱した人の取り留めもない支離滅裂な言葉」(xxxvii)などではなく、「トウェインにとって自伝とは神話形成であった」(xxxvii)と主張する。

自伝には自己宣伝、自己弁明のためのフィクションが含まれることは言うまでもなく、『自伝』は国民作家としてのトウェインの神話形成であった一面も否定できない。しかし、「真実であると同時に不正直でもあるが、常に誠実である声によってまとめられている」(キスキス xl)ことに変わりはなく、トウェインの『自伝』は、彼自身の夢と挫折を〈誠実に〉語った彼の最後の力作であったと言えよう。

トウェインの自伝執筆への強い意欲は、『自伝』の形式と方法への拘りにも表れている。1876年40歳の時に、「本題から逸脱し、散漫」(7)になんて語りの手法をとると決断したトウェインは、1904年フィレンチでは、「その時関心があることのみ」を、「日記と自伝を組み合わせた語り」にすることによって「過去の出来事とコントラストをなす現在の出来事」を鮮明にする方法を考え出した (*Mark Twain's Autobiography* V1, 193)。こうして、「過去と現在が常に向き合い、その結果、その対照によって、鋼と火打石を打ち合わせるように、新たな関心の火花をたきつける」(*Mark Twain's Own Autobiography*, 3)という従来の自伝にはない画期的な方法を編み出したトウェインは、「将来の自伝のモデルになり、(中略) 形式と方法で何世紀にもわたって読まれ称賛される」(*Mark Twain's Own Autobiography*, 3)自伝を書きたいと抱負まで述べるのである。

トウェインの『自伝』の一部は、生前生活費のために、1904年『ハーパーズ』(Harpers)に、また1906年には『ノース・アメリカン・レビュー』(North American Review)と『ニューヨーク・トリビューン・サンデー・マガジン』(New York Tribune Sunday Magazine)に発表された。しかし、没後100年間は『自伝』を公開しないというトウェインの意志にも拘らず、『自伝』は様々に編集されて死後出版され、トウェインの意志は守られることはなかった。

1924年のペイン版は、トウェインの意図した方法に忠実に編集されたものの、物語、手紙、意見が断片的に集められた散漫なものになり、また、トウェインの文学的名声を傷つけるような部分は削除された。1940年にはバーナード・デヴォート (Bernard DeVoto) が、ペインが削除した部分を編集した『憤るマーク・トウェイン』(*Mark Twain in Eruption*) を、また1959年には「自伝の内的順序の本質は時間である」(Neider xxi) と主張するチャールズ・ナイダー (Charles Neider) が、時代順に並べ替えたナイダー版『自叙伝』(*The Autobiography of Mark Twain* 1958)をそれぞれ出版した。これら三作はいずれも不完全なもので、満を持して今回の完全版が発表され

たが、『ニューヨーク・タイムズ』の書評にあるように、完全版もまた、「はんぱもののガラクタ袋で、ペちゃくちやしゃべる老人の回想」(Garrison Keillor)と茶化され、トウェインが試みた〈過去と現在〉が衝突するいわば〈意識の流れ〉による斬新な『自伝』執筆の難しさを浮き彫りにしている。

ところで、ジェイムズ・コックス(James Cox)は、アメリカ革命によってフランクリンという『自伝』プロバーが生まれたと述べ、自伝とアメリカ精神との強い結びつきを指摘している。フランクリンの自伝執筆の目的は「世間の人びとが自分の立身出世と〈分別／理性〉に到達した道程とを見習うよう説得したいと望んだ」(Spengemann 84)ことであり、『フランクリン自伝』(*Autobiography of Benjamin Franklin* 1818)を貫いているのは努力と才覚で人生を切り開いていく独立独歩のアメリカ精神である。一方、トウェインは物質的な成功そのものに対してアンヴィヴァレントな意識をもちフランクリンに批判的であったが、それではトウェインの『自伝』を貫いている思想は何であろうか。

トウェインは、万人が成功するという幻想を抱かせたとフランクリンを批判し、「良い男の子への助言」("Advice for Good Little Boys" 1865), 「良い女の子への助言」("Advice for Good Little Girls" 1865), 「若者への忠告」("Advice to Youth" 1882)など、『フランクリン自伝』を風刺するエッセイを書いている。フランクリンの偽善に反対したトウェインもまた、貧しい階級から勤勉努力によって成功したセルフメイドマンとしてアメリカ精神の体現者である。しかし、「わが人生の転機」("The Turning Point of My Life" 1910)では、人生などに無関心な〈環境〉と生来の〈気質〉が気まぐれに引き起こした出来事によって人生は決まるという決定論を主張する。こうした人生と社会を斜に構えてみる姿勢には、19世紀を鉄道の抵当に入った時代として、18世紀的道徳律で教育を受けた自らを19世紀の失敗者と断じた自伝『ヘンリー・アダムズの教育』(*Education of Henry Adams* 1907)の作者ヘンリー・アダムズ(Henry Adams)と同様の、社会に対するストレンジャー意識を窺うことができる。

トウェインのストレンジャー意識について論じた渋谷によると、『人間とは何か?』(What Is Man? 1906)や『不思議な少年 第44号』(No. 44, *The Mysterious Stranger* 1982)から、何の希望もない世界ならば、むしろ夢だと考えた方がよいのではないかというトウェインのあきらめの気持ちと、世界をそのようなものと認めている自信さえ感じられるという。しかしその中でも、トウェインは生涯にわたって人間らしく生きてゆこうと決心し、多くの非人間共のなかで、真に人間的に生きてゆくためには、この地球でストレンジャーになるしかなかったと渋谷は述べ、その背後にはトウェイン自身がこの地球の人間社会と一体化することを拒否する姿勢があったと看破する。

『自伝』(第1巻)は多くの声によってアメリカの夢と現実を描いているが、そこには社会と人間にに対するトウェインの絶望感があり、渋谷がトウェインの後期作品から論じたストレンジャー意

識をみることができる。本論では、『自伝』（第1巻）から読み取れるトウェインのストレンジャー意識について、『自伝』中のマイノリティ、「資本主義」という環境に対する作者のアンビバレンスから考察してみたい。

## 2. 『自伝』（第1巻）の中のマイノリティ

トウェインは旧南西部の奴隸制の厳しい地域で成長しながら、『自伝』（第1巻）では奴隸制について、黒人と白人は「完全には溶け合うことはなかった」（211）という一言で逃れている。クオールズ農場での少年時代の思い出を語る有名な章でも、奴隸制は黑白共存のノスタルジーとして回顧され、奴隸制の問題は「天国のような少年時代」というパストラルな風景の中に消滅している。『ハックルベリー・フィンの冒険』（*Adventures of Huckleberry Finn* 1885）結末と同様に、『自伝』（第1巻）においても奴隸制の問題は回避されている。ただ、1906年にカーネギーホールで行われたブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington）のタスキーギ・インスティチュートの寄付金集めの集会でのトウェインのスピーチが完全版に収められているが、彼は教育を通して黒人の地位向上を目指したワシントンなどいわゆる同化主義者の黒人を積極的に支援し、ここに反奴隸制の北部伝統への彼の〈同化〉を見ることができる。

マイノリティの中で興味深いのがインディアンに対する語りである。少年時代に接触したインジャン・ジョーについて、酔っ払うと面白いし善行を行うが、しらふの時は恐ろしかった、とユーモラスに語る。トウェインはまた、インジャン・ジョーが死んだ時は悲しかったと述べながら、サタンがインジャン・ジョーを連れに来たのであり、彼のような人間が地下世界に連れて行かれるのは正しいと言う（397）。少年時代の思い出として語られる善良な黒人像と邪悪なインジャン・ジョーとの対照は興味深いところであるが、インジャン・ジョーに対するユーモラスな語りのなかに、インジャン・ジョーへの単なる憎しみだけではない愛情も感じられる。

先住民に対するトウェインの共感は乏しかったと言われるが、『自伝』からは、晩年のトウェインが、インディアン征服と帝国主義との連続性を認識することのできた、当時の数少ないアメリカ人の一人であったことが窺える。彼は、「インディアンはとっくの昔に遍く、我々の満足がいくように絶滅し、天国との取引は感謝と共に終わった」（268）とインディアン征服は白人側へ神が味方したものだとれる言い方をする。一方で、「国民的良心は一蹴のもとにきれいさっぱりと拭い去られ、罪は古い台の上で再開されるのだ」（268）と拡張主義に対するアメリカ人の罪意識の欠如と無自覚を笑う。こうした語りに表れるトウェインの揺れる認識の中にも、インディアンに対する憎しみと同時に愛情が感じられるのではなかろうか。

さて、『自伝』中のマイノリティに対する語りのハイライトとも言うべき箇所は、1906年3月6日から8日にかけて行われたアメリカ軍によるフィリピンのモロ族虐殺に対する、トウェインの激

しい怒りの表出部分であろう。彼は学校時代の思い出を中断して、数日前に行われたアメリカ軍の軍事行動について2日に分けて激しい口調で批判する。彼は、武器らしい武器も持たないモロ族を近代的兵器で完膚なきまでにやっつけて恍惚感に浸るセオドア・ルーズベルト大統領 (Theodore Roosevelt) やアメリカ軍の残酷さを告発する。兵士たちの軍行を「長く幸せなピクニック」と揶揄する一方、「恐怖にひきつった顔、涙、母親に泣きつき、小さな手で母親にしがみついているのが見える」(405) と女性・子供まで無差別に殺されたモロ族に対して深い同情を寄せ、「我々の軍服を着た暗殺者」が「アメリカ国旗を汚した」(405) と口を極めて罵る。さらに、「アメリカによって給与を支払われる兵士に代表されるキリスト教徒のアメリカが、聖書と黄金律で〔モロ族〕を撃ち落したとしても」(405) 立派な軍功をあげたことにはならないと愛国心に疑問を呈し、同時に、植民地主義と結びついたキリスト教を批判する。

中野は、ウィリアム・マッキンレー (William McKinley)、ルーズベルトの2代の大統領が米西戦争を、「戦争をやめさせるために中立国として行なう強制的干渉」(26) と位置づけて反植民地主義の伝統と折り合いをつけ、「よい戦争」(25) として国民の熱狂的な戦争支持のなかで遂行したと指摘する。ヘンリー・アダムズの友人でありトウェインとも親交のあったジョン・ハイ (John Hay) は、マッキンレー、ルーズベルトのもとで国務長官を務め、アメリカの帝国主義政策を推進していく。ヨーロッパ列強が植民地支配に狂奔するなか、ハイは極東、カリブ海、中央アメリカ、アフリカといった新しい市場へのアメリカの経済的拡張こそアメリカの政治的安定にとって不可欠と考えたのである。

ジョン・カルロス・ロウ (John Carlos Rowe) によると、アダムズは、反帝国主義者であったが、彼の反帝国主義はヨーロッパ、ロシアに対してであって自国に対してではなく、彼はフィリピン併合を白人の背負うべき植民地的責任と考えマッキンレーの現代性を認めていたという。高い道徳律で教育されたアダムズは、19世紀資本主義社会でトウェイン同様に深い厭世観に沈んだが、彼でさえ、中野の指摘する当時のアメリカの帝国主義言説の追従者となっていた。中野はさらに、当時の帝国主義言説に、現代におけるアメリカの「人道介入」の論理との共通性を見出しているが、こうした点からも侵略戦争の非人間性を見逃さなかったトウェインの偉大さがわかる。

『自伝』巻末の注で編者は、長女スージーと次女クララの家庭教師リリー・ギレット・フット (Lilly Gillette Foot) が、コネティカット・インディアン協会創設メンバーであり婦人先住民支援組織にもいた女性の姪にあたり、トウェインがこの家庭教師から何かを学んだことは間違いないと指摘する (579-80)。フットはビーチャー家の親戚で、反奴隸制から反帝国主義に至る伝統を有する北部知識階級の出身であるが、編者も示唆するように、この家庭教師との交流によってトウェインは先住民に対する人種観を克服していったと言えるであろう。

以上見てきた白人としての差別意識と共感を偽善なしに告白するトウェインの偉大さは、例えば

次の巻末注の例からも明らかであろう。トウェインがR. I. ロッジ (R. I. Dodge) の『我らが未開インディアン—大西部のレッドマンの中での33年間の個人的体験』(*Our Wild Indians: Thirty-three Years' Personal Experience Among the Red Men of the Great West* 1883) について、『マーク・トウェインのハンニバル、ハックとトム』の中で次のように述べていることを編者は明らかにしている(580)。

“The Indian's bad God is the twin of our only God; his good God is better than any heretofore devised by man. … Our illogical God is all-powerful in name, but impotent in fact; the Great Spirit is not all-powerful, but does the very best he can for his injun and does it free of charge. … We have to keep our God placated with prayers, and even then we are never sure of him—how much higher and finer is the Indian's God” (*Mark Twain's Hannibal, Huck and Tom* 90, 下線は筆者)

訳：「インディアンの悪しき神は我々の唯一神と双生児なのだ。インディアンの良き神はこれまで人間によって考案されたどんなものよりもよい。… 我々の非論理的な神は全能とは名ばかりで、実際のところは無力だ。大靈は全能ではないが、インジャンのためにできることには最善を尽くす、それもただで。… 我々は我らの神を祈りによって鎮めておかなければいけないがそんな時でさえ、神に対する確信をもてない—インディアンの神の方が遙かに高貴で立派ではないか。

ここでもトウェインはキリスト教の全能とされる神の無力を批判する一方で、下線部のように、インディアンの「大靈は全能ではないが、インジャンのためにできることには最善を尽くす、それもただで」とインディアンの神をユーモラスに称賛する。先述したタスキーギ・インスティチュートの資金集めの集会でのスピーチでも、キリスト教の私的モラルを称賛する一方で公的モラルは「信仰と正当な価値をだいなしにする」(306)と批判している。キリスト教の神に背いて地獄行きの決意をするハックや、決定論、人間機械論に傾いた晩年のトウェインのキリスト教に対する懷疑を考え併せると、インディアンの神に対する称賛はトウェインらしいところである。まさに、トウェイン自身の心に忠実な態度ゆえに、自己のアイデンティティの揺れを露呈し、それが忠実に反映した箇所とも言えるであろう。

トウェインは『自伝』(第1巻)で、黒人、インディアン、モロ族、フィリピン人を“savages”と呼び、“animals”や“rats”に喻える。また、イギリス滞在中に目撃した路上の黒人ミンスト렐・ショーを、そのみすぼらしさや子供っぽさから「人間でいることが恥ずかしくなる」(114)と述べ、ハックが、詐欺師の王様と公爵に対して発した台詞を繰り返している。エイミィ・カプラ

ン(Amy Kaplan)は、1866年のトウェインの『ハワイ通信』(Letters from Hawaii 1966)から、非白人に対する彼のコロニアルな眼差しを指摘し、帝国主義的傾向や人種的偏見を孕んだトウェイン像を炙り出した。また、ポール・オツカ(Paul Outka)も『ハックルベリー・フィンの冒険』結末を、奴隸制の問題を回避してロマン主義的な西部を創造したもので、19世紀末から20世紀初めにかけての白人優越主義のイデオロギーを提示していると批判する。非白人やそれを想起させるものに対するこうしたトウェインの言説からは、カプランやオツカが指摘するトウェインの帝国主義的傾向や人種的偏見、19世紀末から20世紀初めにかけての白人優越主義のイデオロギーの体現者の姿を見ることができよう。

しかし、インディアンへの語りに見られるように、彼にはマイノリティに対する差別意識と同時に共感があった。彼の弱者に対する共感は、ツァー独裁体制下で苦しむロシア人に対しても表れている。巻末の注には、トウェインがポートマス講和会議が始まった時にボストン『グローブ』誌の編集長へ「ロシアは、気違ひ沙汰の、耐え難い奴隸制からの解放の途上にある」と記した手紙を送っていたことが明らかにされている。トウェインは、ルーズベルトがポートマス講和会議を開催して日露戦争を終結させ、ツァー独裁体制の存続に加担したとし、「(軍医の)シーメン博士と私自身以外にこの全くの愚策に対し公に抵抗する者はこの国」(462)にいなかつたと無念さをにじませる。「我々は生命と自由のために闘う抑圧された人々への以前に持っていた共感を失ってしまったのだ」(462)と、彼が1900年に入会した反帝国主義連盟の言葉を借りて嘆くのである。

彼はまた『自伝』でベルギーのレオポルド2世のコンゴでの圧制にも言及しているが、王の残虐さを風刺した『レオポルド王の独白』(King Leopold's Soliloquy : A Defense of His Congo Rule 1905)は『ノース・アメリカン・レビュー』への掲載を断られても、原稿の公表にこぎつけ、収益金はコンゴの救援活動に使われたという(『マーク・トウェイン文学／文化辞典』39-40)。

トウェインは、『間抜けウィルソンの悲劇』(The Tragedy of Pudd'nhead Wilson 1894)の最終章に掲げた「ウィルソンの暦」で次のように述べる。「10月2日 アメリカ大陸発見記念日。アメリカを発見したのはすばらしかった。だが発見し損ったらもっとすばらしかったろう」(113)。トウェインはこの作品で、〈白い肌の黒人〉というフィクションによって人種差別をするアメリカの存在そのものに対する怒りと絶望をストレートに表明している。一方、この『自伝』(第1巻)は心の自由と不可解さの間で揺れる作家の口述だったので、作者としては19世紀の白人としてマイノリティ問題に正義論をぶつことなく、自分の立場を奔放に語ることができた。しかし、そこには、「ウィルソンの暦」で表明しているマイノリティ／弱者への共感とアメリカに対する絶望の姿勢を見ることがある。

### 3. 資本主義という環境とトウェイン

第一節で述べたように、トウェインは物質的成功に対してアンビバレントな姿勢を貫いたが、『自伝』（第1巻）では富への渴望と幻滅が率直に語られる。彼の富への渴望と幻滅の始まりとなるのが、11歳の時に亡くなった父親が残した7万5千エーカーのテネシーの土地に纏わる物語であろう。

テネシーの土地については、1870年から書き始められた『自伝』（第1巻）の冒頭のみならず、1897年から1898年にかけての草稿の中でも繰り返し語られ、トウェインにとってこの土地のもつ意味の大きさを物語っている。父親は、テネシーの土地には鉄鉱石が産出し、農作物も実り、鉄道も敷設されるだろうと語り、家族全員が「金持ちで幸せ」（63）になれる夢に浸る。しかし、「土地にしがみついて待て。土地をだまし取られないようにせよ」（206）という父親の言葉は、次第に「呪い」となって家族の精神的負担となった挙句、兄オーリオン（Orion Clemens）によって値打ちのないものとして売られるが、その後でその土地から石油や鉱石が出る。トウェインは人生のスタートからこうした悲喜劇ともいえる不運に見舞われるのである。

テネシーの土地は、渡辺も指摘するように「新大陸で新しい出発をするクレメンズ家の本拠地となるべきものだった」のに、トウェインら子供たちに虚しい夢を与えるだけに終わり、彼は「そもそも最初から帰属すべきアメリカの土地を失った根なし草として生涯を始めた」（24）のである。トウェインは晩年の世界講演旅行のみならず、若い頃から西部、ハワイ、中近東、ヨーロッパと旅し、〈放浪の旅〉の一生を送った。彼の〈放浪の旅〉からはどの地にも安住できないトウェインのストレンジャー意識を窺うことができるが、彼のストレンジャー意識は、虚しい夢に終わり、確固としたアメリカの土地を持つことができなかつたテネシーの土地と深い関わりがあると言えよう。

12歳の時から印刷工見習いとして職業生活をスタートしたトウェインは、21歳からミシシッピ川蒸気船パイロットとなるものの、南北戦争勃発によって失業する。25歳の時にネヴァダ準州政務長官の職を得た兄オーリオンとともにネヴァダに行き銀鉱堀として一攫千金を狙うが文無しとなって新聞記者となる。ネヴァダ時代の回想は、彼が1906年1月にニューヨーク・タイムズのビジネス欄の記事でネヴァダの銀鉱株が1870年代前半に20倍に急上昇したことを読み、ネヴァダ時代のことを思い出したという〈過去と現在〉の邂逅から始まるが、巻末の編者注によると、こうした記事はないという。

『自伝』（第1巻）では一攫千金を狙って狂騒するフロンティア群像が淡々と語られる。1862年から2年間ネヴァダにあるヴァージニア・シティで『エンタープライズ』紙（*Virginia City Territorial Enterprise*）の記者をしたトウェインは、この新聞社の創始者で文人でもあったジョゼフ・グッドマン（Joseph T. Goodman）によって才能を見出されて作家となるきっかけをつかみ、彼と生涯を通して友情を結ぶ。この『エンタープライズ』紙の創刊者グッドマンとデニス・マッカーシー

(Denis McCarthy) は、「若さ、エネルギー、希望」(252) を持った若い渡り印刷工で、フロンティアの繁栄とともに新聞発行人として大成功したことが語られる。しかし、グッドマンは『エンタープライズ』紙を辞めてから株取引やブドウ農園など次々と新たな事業に乗り出すが成功せず、晩年、中央アメリカとユカタン半島遺跡の碑文の研究をして本を出版する。

この研究についてトウェインは「最も見込みのない、困難で骨の折れる研究」(254) と述べるが、グッドマンが最後にマヤ文明の研究に向ったことは、マネーレースに疲れ精神世界に救いを求めたともとれよう。マッカーシーについては、編者注によると、1865年に『エンタープライズ』紙の所有株を売り、サンフランシスコに行って株取引をするが失敗する。しかし1874年のビッグボナンザの時にサンフランシスコの『クロニクル』紙 (*Chronicle*) で編集をし、投資でも成功し、ヴァージニア・シティに戻って『イブニング・クロニクル』紙 (*Evening Chronicle*) を買い取りネヴァダ史上最も購読者数の多い新聞にする。浮沈を経ながらも彼はビジネスで大成功をおさめるが、酒の飲み過ぎで4年後に亡くなったという。

トウェインは西部銀鉱堀時代の半自伝的作品『苦難を忍びて』(*Roughing It* 1872) で、一攫千金の夢を抱いて集う西部を活気に溢れた世界として描く一方、文化不毛の地としての倦怠を述べている。『自伝』(第1巻) でのグッドマンらのフロンティア群像の語り口からも、懐旧の念とともに、金に踊らされる人生に対するトウェインの西部社会への距離感を窺うことができる。

トウェインは作家として成功し国民作家となった後もビジネスに強い関心を抱き、様々な投資を行うが、出版社チャールズ・ウェブスター社の経営もペイジ植字機への投資も悉く失敗する。特にペイジ植字機にまつわる顛末が語られる1890年の「機械エピソード」の章ではジェイムズ・ペイジ (James Paige) への怒りを露わにする。ペイジを「夢想家、空想家、詩人、機械の発明におけるシェイクスピア」(102) と痛罵し、「他の者には損害を与え自らに利益をもたらすような契約をしながら、いかなる時もそんなことはおくびにも出さないし、口約束の段階では言いもしない」(103) とペイジのずる賢さや不誠実さを批判し、そのような人物を信じて大金を投資した自らを「フール」(103) と自嘲する。

ペイジに騙され破産したトウェインと似た運命をたどったのが、ビジネスパートナーとなった部下に裏切られたグラント将軍 (Ulysses S. Grant) で、彼との交友が『自伝』(第1巻) で語られている。トウェインはグラント将軍の回想録を彼の出版社から出版するが、迷っている将軍を決心させたのは金銭で説得することであったと述べ、グラント将軍さえ「日常の生活に苦しむ資本主義社会」(77) の現実を語る。グラントの息子が「父はグラント家がフールの集まりだとわからせようとしている」(83) とトウェインに述べるように、グラントもまた、ビジネスパートナーに裏切られる。このグラントに関する記述が書かれたのが1885年であるが、トウェインもまたペイジ機への投資に失敗してこの10年後に破産し、トウェインはグラントに同じ「フール」として共感

するところがあったのであろう。

トウェインは謹厳であった父親に対し親しみを感じることはなかったと言われるが、『自伝』では、経済的苦境と紳士階級としてのプライドの間で葛藤しながら亡くなった父親の姿が愛情をもつて語られている。1834年のジャクソン大統領の合衆国第二銀行に対する攻撃によって引き起こされた金融危機で土地の価値は4分の1にまで下がり、父親は大損をする。また、債権者への支払いのために損をして土地を売り父親は破産するが、1841年の連邦破産法で借金返済が猶予されることになる。さらに、父親が治安判事になり家が裕福になるかと期待したら、宣誓式に行った帰りに嵐にあい胸膜炎にかかり死亡する。次々と変動するアメリカ資本主義制度に翻弄されながら誠実に生きた父親の人生を語るトウェインの語り口からも、フールとしての父親の姿が浮かびあがってくる。

以上の「フール」という言葉は、自己のストレンジャー性を認め、偽善、制度に縛られず、自由な心情のままにフールに生きるという肯定的人生観の表現である。それゆえ、トウェインは制度上の資本主義ではなく、体制が許す自由を享受して、「環境」のなかで自由に生きることができた。だが、体制の制度ゆえに彼は苦しむことになり、ストレンジャー意識を強くしていくことになる。

秋元は、トウェインとグラントは部下によって地位を取り換えられようとしたとし、両者のこうした共通性を、当時の金本位制と銀本位制の論争にからませて論じている。グラントの秘書アダム・バードーはグラントの回想録を自分が書いたものだと吹聴してグラントの地位を奪おうとし、トウェインは彼の出版社を任せていた姪の夫チャールズ・ウェブスター（Charles Webster）が提案した契約にろくに目を通さずサインしたことによって、会社の実権を奪われる。19世紀末に起こった金本位制と銀本位制の論争は、「貨幣となる地位を金と銀が奪い合っている」ことに他ならず、グラントと秘書、トウェインとウェブスターとのせめぎ合いを金と銀との本位制争いに擬えて、「資本主義のフィクション性の象徴としてふさわしい」（秋元 41）というのである。トウェインのストレンジャー意識はこうした資本主義のもつフィクション性に対する嫌気にも起因していると言えよう。

ウィリアム・ディーン・ハウエルズ（William Dean Howells）言うところの環境の人トウェインの『自伝』（第1巻）では、「資本主義」という環境のなかで投機熱に踊らされる一方、夢を求めて失敗する自らを嘲笑し、ジェイ・ゴード（Jay Gould）などの資本家の私利私欲や腐敗堕落を批判する。こうした点にトウェインの「資本主義」という環境へのアンビバレンスが現れている。

しかし、トウェインが財政危機に陥った時に彼を物心両面で支えたスタンダード石油の重役などの資本家について『自伝』（第1巻）でも語られているが、資本家を敵視しているのではなく、金の使い方を問題としている。例えば、窒息してしまいそうなマグノリアの香るバトン・ルージュの議事堂の復旧工事について『ミシシッピ河上の生活』（*Life on the Mississippi* 1883）第40章で次

のように述べている。「この二セ建築が、今日、復旧工事を行なってまた永続的なものとされたのだから、なおさらである。初めに温かい心の火をもやして作ったものなら、さっさとダイナマイトで吹っ飛ばして、復旧工事の金を何か真正なものを作るために使ったほうが、はるかにましであろうに。」(417)

サー・ウォルター・スコットの中世趣味に侵された南部人のセンチメンタリズムを批判するトウェインの小説が、「フェニモア・クーパーの文学的反則」(“Fenimore Cooper's Literary Offences” 1895) で指弾したクーパーのロマン主義の反則を避けようとしながら、『金めっき時代』(The Gilded Age 1873) などで金銭に関わる問題を大胆に伝えたが、より自由な形式の『自伝』では金銭に拘る。

『苦難を忍びて』では「光るものすべてが金ならず」(188) と表面的なものにばかり追い回される自らを反省し、『金めっき時代』でも空想の富に浮かされる愚かさや、金権政治の腐敗、民主主義の疲弊、人心の荒廃を風刺している。この点、『自伝』(第1巻) は富への欲望を率直に述べているため、彼の実像に迫ることができ、サミュエル・クレメンズ(Samuel Clemens) とマーク・トウェインとの二重性のなかに、『自伝』と小説の分断現象を見ることができる。

こうしたトウェインの二重性は、晩年の未完作「大きな闇」(“The Great Dark” 1898) の最後で船の行方と神の命令の不可解さとして表現されている。「この船がどこにいるのか私はわからん。わからんが、神の御手の中にある。私はそれで充分だし、諸君にとっても充分だし、だれだって、大工以外には、充分なんだ。それが神の御意ならば、おれたちは切り抜ける、きっと切り抜ける—そうでなければそれまでだ。」

つまり、虚構作品が擬似プロットに縛られていたのに対し、『自伝』(第1巻) では場面に応じた環境の人トウェインの自由が輝き、彼の奔放な多面性がほとばしり出ている。しかし、晩年になるにつれて、小説は未完が多くなり、以上の分断現象は露わにならなくなってしまう。元々、トウェインは奴隸制や資本主義などあらゆる政治経済システムを洞察し、それを超えて、記憶のパストラルに回帰していく傾向があるが、その文学的な営みの帰結はハーマン・メルヴィル(Herman Melville) の曖昧性への帰着とどこかでつながっているようである。資本主義社会のなかで富を求める一方誠実に生きようとしたトウェインは、社会のストレンジャーとして生きていく他なかったのである。

#### 4. まとめ—ストレンジャー意識と共感

晩年のトウェインの帝国主義批判からも明らかのように、本論第2節で言及したカプランとオツカの二人の批評家が批判するトウェインのコロニアルな眼差しや帝国主義的傾向はある程度脱したと言えよう。ただ、黒人やモロ族を “savages” と呼び、白人優越主義のイデオロギーを終生堅持

していたことは否定できない。

しかしながら、トウェインは帝国主義と資本主義の進行した19世紀アメリカ社会のなかで、人種や国籍や階級を越えてあらゆる弱者に共感することができた誠実な作家であったと言うことができる。『自伝』ではグラント将軍やロックフェラーなど政財界のリーダーを始め、国内外の主流を占める人たちとの華麗なる交流が回想される。また、知識階級の住むハートフォードでのJ.H.トウィッ切尔（J. H. Twichell）牧師やストウ夫人（Harriet Beecher Stowe）一族との個人的交際やマンデー・イヴニング・クラブを始めとする中産階級の人々との交流が語られる。彼の娘クララも「父のもっとも特徴的な性格のひとつは、困っている人に暖かい同情を示すことでした」（11）と述べているが、彼は有名人との交際の中でも、弱者への共感を失うことはなかった。

トウェインの精神史を論じたシャーウッド・カミングス（Sherwood Cummings）はトウェインに大きな影響を与えた思想としてフランスのヒッポライト・テーヌ（Hippolyte Taine）の共感の思想を挙げている。テーヌの共感とは「作家が他者の心の中に入っていき、自分自身とは対極にある習慣や感情の体系を己の中に再生産すること」（80）である。『苦難を忍びて』の後半部にはカプランのトウェイン批判の対象となったハワイでの見聞録が収録されているが、そこで彼は、女性は分を知れという教えについて、「宣教師がこの申し分ない暗黙の了解を反故にした」（459）とか、「原住民は家族が必要以上にふえたら、子供を埋めてしまうという夢のような習慣を持っていた」（459）と述べている。ここに西欧の基準では測ることのできない先住民の習慣を理解しようとするトウェインの共感の態度をみることができる。

D. H. ロレンス（D. H. Lawrence）は、『古典アメリカ文学研究』（*Studies in Classic American Literature* 1923）で、ホイットマン文学はあらゆる人に共感を持つことがアメリカ・デモクラシーの体現であると考えたとして次のように述べている。「魂は魂に共感する。（中略）愛の共感、憎しみの共感、単なる親近の共感—もっとも激しい憎しみから最も熱烈な愛にいたる」（368）。マイノリティに対して憎しみと共に愛を感じ共感を示したトウェインは、ロレンスの指摘するこうした点でもまさにアメリカ・デモクラシーの体現者と言えよう。

また、トウェインは勤勉努力によってすべての少年が成功するという幻想を抱かせたと『フランクリン自伝』の人生論を批判したことは既に述べたが、文学論ではジェイムズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper）のロマン主義的インディアン像に否を唱えた。「クーパーの文学的反則」で、「クーパーの目がすばらしく不正確であった」（184）とクーパーの觀察力のなさを批判したトウェインは、「続・フェニモア・クーパーの文学的反則」（“Fenimore Cooper's Further Literary Offenses” 1895）では、「洗い清められたクーパーインディアン（A Cooper Indian who has been washed）は哀れで、平凡だ。スリルを与えてるのはクーパーの脚色（paint）によるクーパーインディアンだ。クーパーの余計な言葉がクーパーの脚色—彼の脚色、羽根飾り、

彼の斧、彼の闘の声一なのだ」(198)と批判する。トウェインは「インディアンの中のハック・フィンとトム・ソーサー」("Huck Finn and Tom Sawyer Among the Indians" 1884)で白人一家を惨殺するインディアンを描き、「高貴なるインディアン」像を創造する従来の文学観を否定している。

トウェインのクーパー論には、リアリストであり、環境の人であったトウェインの経験への共感といったものが現れている。マイノリティをロマン主義的には捉えず、弱者に注ぐ温かな視線には、フランクリンの人格やクーパーの芸術といった、両者に見られる偽善に反対したトウェインの実像を伺うことができる。

ロレンスは21世紀アメリカを予言して次のように述べる。

今のところまだ、地の悪霊、死んだ人間たちの迷える亡霊は、白人の魂の、無意識ないし意識下の領域にとどまっているが（中略）今の世代がおわらぬうちに、いま生き残っている赤色インディアンたちも、白人という巨大な湿地帯の中に吸収されるにきまっている。そうなったとき、アメリカの悪霊の作用は顕在化して、眞の変化が認められるにいたるだろう。（82-83）

ロレンスは白人がインディアンを滅ぼしてからのその先が大切だと述べ、インディアンと白人が共に感じ合う関係が築かれる日が訪れる事を期待する。

ロレンスはまた、レザーストッキング・テールズ ("Leather-Stocking Tales") での老年期から輝かしい青年期へと時の流れを遡行するクーパーの神話こそアメリカの神話だと主張しているが、古い意識から新しい意識へと脱皮するロレンスの態度と、黒人奴隸性の問題に関して新しい意識へと脱皮することのできなかったハックとジムの苦いパストラルの愛とを今後比較検討する必要があるかもしれない。今回の結論としては、アメリカ帝国主義の欺瞞性や非人道性を見抜き、社会の主流に抗って、皮肉やユーモアを交えながら反対の声を挙げ続けたトウェインのマイノリティに共感する姿勢、資本主義社会の中でのアンビバレンスには、トウェイン自身が当時の社会情勢や人間社会と一体化することを拒否するストレンジャーとしての姿勢が表れているということである。

正義や偽善やイデオロギーなど公的なものは自己の「自由」を束縛するものとし、そうしたものからの逃避の姿勢が濃厚なトウェインは生と文学において「人間らしく」をモットーとした。「人間らしく」とは、アメリカ人、白人、南部人という言動を拘束するものを越えて一人の人間として正直に生きることである。ここにトウェインの偉大さと『自伝』(第1巻)の意義がある。『自伝』(第1巻)を淡々と語るトウェインの姿にはストレンジャーとしての意識が見られ、それはもう一つのアメリカ神話の体現であると言えよう。

## 要旨

『マーク・トウェイン自伝』（第1巻）にみられるトウェインのストレンジャー意識と共感について、以下の2点から考察した。まず、マイノリティに関して、先住民に対する語りとアメリカ軍によるフィリピンのモロ族虐殺についての怒りの表出部分を検討し、マイノリティ／弱者への共感とアメリカに対するトウェインの絶望感、それに伴うストレンジャー意識を指摘した。次に、資本主義に対するアンビバレンスな姿勢について、「フール」という言葉をキーワードに検討した。「フール」という言葉は、自己のストレンジャー性を認め、偽善、制度に縛られず、自由な心情のままにフールに生きるという肯定的人生観の表現である。それゆえ、トウェインは、制度上の資本主義ではなく、体制が許す自由を享受して、「環境」のなかで自由に生きることができた。トウェインにとって人間らしく生きるとは人間として正直に生きることであったが、それこそストレンジャー意識を持ちながら、他者／マイノリティへの共感をもつということであった。人間として正直に生きることはまさに、マーク・トウェインの偉大さとともに、彼の自伝の意義でもあった。

## 注

本論は、2011年10月8日日本マーク・トウェイン協会大会（於：近畿大学本部キャンパス）ワークショップ（「マーク・トウェインの自伝を読む」）での発表「マーク・トウェインとエスニシティ」に加筆したものである。

1. 第1巻には1870年から1904年までの草稿と、ニューヨークで1906年1月9日から同年3月30日まで計47回にわたって連日のように口述筆記されたものが収められている。

## 引用参考文献

- Cox, James M. "Autobiography and America," *Virginia Quarterly Review* 47, 1971:252-77.
- Cummings, Sherwood. *Mark Twain and Science : Adventures of a Mind*, Baton Rouge: Louisiana State UP, 1988.
- De Man, Paul. *The Rhetoric of Romanticism*. New York: Columbia UP, 1984. 『ロマン主義のレトリック』山形和美・岩坪友子訳、東京：法政大学出版局、1998年。
- Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture*. Cambridge: Harvard UP, 2002.
- Kiskis, Michael J. "Introduction." *Mark Twain's Own Autobiography — The Chapters from the North American Review*. Ed. Michael J. Kiskis, Madison: U of Wisconsin P, 1990. xv-xl.
- Outka, Paul. *Race and Nature : From Transcendentalism to the Harlem Renaissance*, New York: Palgrave Macmillan, 2008.

- Rowe, John Carlos ed. *New Essays on The Education of Henry Adams*, New York: Cambridge UP, 1996.
- Spengemann, William C. *The Forms of Autobiography: Episodes in the History of a Literary Genre*, New Haven: Yale UP, 1980. 『自伝のかたち—文学ジャンル史における出来事』 船倉正憲訳, 東京: 法政大学出版局, 1991年。
- Twain, Mark. *Life on the Mississippi*. Ed. Shelley Fisher Fishkin, New York: Oxford UP, 1996.
- . *The Autobiography of Mark Twain*. Vol.1. Ed. Harriet Elinor Smith. Berkley and Los Angels: U of California P, 2010.
- . "The Great Dark", *Mark Twain's Which was the Dream? and Other Symbolic Writings of the Later Years*. Berkeley: U of California P, 1968.
- . *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, Ed. Sidney E. Berger, New York: W.W. Norton, 1980.
- . *Roughing It*, Ed. Harriet Elinor Smith, Berkley and Los Angels: U of California P, 1993.
- . and Albert Bigelow Paine. *Mark Twain's Autobiography*. Vol 1 and Vol. 2. USA: Kessinger Publishing.
- 秋元孝文「トウェインの書いたユリシーズ・S・グラントのサイン—「どちらが夢か？」とサイン・主体・金銀複本位制」『マーク・トウェイン 研究と批評』(日本マーク・トウェイン協会) 第9号 (2010) : 33-41.
- クレメンズ、クララ『父マーク・トウェインの思い出』 中川慶子・的場朋子・宮本光子訳, 東京: こびあん書房, 1994年。
- D. H. ロレンス『アメリカ古典文学研究』野崎孝訳, 東京: 南雲堂, 1987年。
- 中野聰『歴史経験としてのアメリカ帝国—米比関係史の群像』, 東京: 岩波書店, 2007年。
- フィリップ・ルジェンヌ『フランスの自伝—自伝文学の主題と構造』 小倉孝誠訳, 東京: 法政大学出版局, 1995年。
- 渡辺利雄「マーク・トウェインと自伝」『マーク・トウェイン 自伝』 渡辺利雄訳・解説, アメリカ古典文庫6 3-31. 東京: 研究社, 1975年。

Mark Twain's Feeling as a Stranger and His Sympathetic Imagination

in *Autobiography of Mark Twain* Vol. 1

Atsuko Mizuno

Department of General Studies

*Autobiography of Mark Twain* Vol. 1 was published in November, 2010 according to Mark Twain's will that his autobiography would be released one hundred years after his death so as he could speak "from the grave" freely. The autobiography which consists of a diary-like collection of descriptions, sketches, speeches and letters, had been written and dictated over 40 years of his latter life. Mr. Shibuya suggests that there is a sense of Twain's feeling as a stranger in *What Is Man?* and *No. 44, The Mysterious Stranger* which were published during the last phase of his life. The purpose of this paper is to investigate both Twain's feeling as a stranger, which Mr. Shibuya acutely points out, and his sympathetic imagination in the autobiography. Twain's feeling as a stranger arouses from his despair to the human society. He felt the only way to lead a life worthy of man in such a society was to live as a stranger. In his life-long struggle to lead such a life, I understood his sympathy towards others, especially the socially weak.

First, I will discuss his narration about the minorities such as the native Americans and the Philippine's Moros in the autobiography. Twain has been said to not have sympathy for the native Americans. But I felt his sympathy for the native American. For example, he said about Thanksgiving Day as follows; "the national conscience is wiped clean with one swipe, and sin is resumed at the old stand". From this quotation, I can say that he was one of the few Americans in the early days of the 20th century who could recognize the close relationship between Indian conquest and American imperialism. We also find Twain's sympathy towards the minority in his comments on the killing of six hundred Moros by the American army in the Philippines. He attacks the American army and Presidents such as William McKinley and Theodore Roosevelt severely.

Secondly, I notice the word "fool" as which General Grant describes himself and his family. Grant became poor in his last days because he had been deceived by his business partner who had followed Grant from his army days. Twain implies that he is as fool as Grant. He was so eager to get money that he had indulged in a gold fever

in his western days and later invested huge amounts of money to Paige Typesetting Machine, but he finally went bankrupt. The word “fool” shows he not only admitted to being a stranger in his society but also he had an affirmative view of life. In other words, he tried to live according to his own feelings without being restricted by hypocrisy and capitalism.

Lastly, I conclude that we can specify Twain as a writer “who enters into the mind of another, and reproduce in himself a system of habits and feelings opposed to his own”, as Sherwood Cummings’s comments. Rejecting public morals such as justice and ideology as a bondage of his freedom, Twain tried to escape such public morals and had a motto of living deserving of human dignity. To Twain, to live deserving of human dignity means to live as a man honestly, which is to live as a stranger and have sympathies towards others. To live as a man honestly is just both the greatness of Mark Twain and the significance of his autobiography.



〈学会発表抄録 2011年〉

48th Annual Rocky Mountain Bioengineering Symposium  
&  
48th International ISA Biomedical Sciences Instrumentation Symposium  
A MOBILE PHONE-BASED ECG AND HEART SOUND MONITORING SYSTEM

Junichi Iwamoto, Hidekuni Ogawa, Hiromichi Maki, Yoshiharu Yonezawa, Allen W. Hahn  
and W. Morton Caldwell

(JI) : School of Medical Technology, Sanyo Women's College, Hiroshima 738-8504, Japan.

(HO) : Department of Health Science, Hiroshima Institute of Technology, Hiroshima 731-5193, Japan.

(HM) : Department of Health Science, Hiroshima Institute of Technology, Hiroshima 731-5193, Japan.

(YY) : Department of Health Science, Hiroshima Institute of Technology, Hiroshima 731-5193, Japan.

(AWH) : Department of Vet. Med. and Surg., Univ. of Missouri-Columbia 65211, USA

(WMC) : Caldwell Biomedical Electronics, Finleyville, Pennsylvania 15332, USA

ABSTRACT

We have developed a telemedicine system to monitor a patient's electrocardiogram (ECG) and heart sounds (PCG) during daily activity. The complete system, consisting of an ECG recorder, an accelerometer and a 2.4 GHz low power mobile phone, is mounted on three chest sensing electrodes. The accelerometer records the PCG produced by closing of the mitral and aortic valves (S1 and S2). The sampled ECG and PCG are stored in the system for two minutes and continuously updated. When a patient feels heart discomfort such as angina or an arrhythmia, he/she pushes the data transmission switch on the system. The ECG and PCG for the next two minutes are stored in the system, and then the system then sends the four minutes of stored data directly to a hospital server computer via the 1.9 GHz low power mobile phone. These data are stored on the server and then downloaded to the physician's Java configured mobile phone. The physician can then check the patient's cardiac condition, regardless of patient or physician locations, and then take appropriate actions.

Keywords : Telemedicine system, ECG, PCG, Accelerometer, Mobile phone transmission

## 第58回日本食品科学工学会大会

2011年9月9日～9月11日 東北大学 仙台市

### 小麦澱粉の糊化およびゲル化過程におけるリゾレシチンの動態 —澱粉粒には存在状態が異なる3種類のリゾレシチンが存在する—

#### 【著者】

石永正隆<sup>1)</sup>, 上田愛子<sup>2)</sup>, 田村美穂<sup>2)</sup>, 松中千恵<sup>2)</sup>

1) 山陽女子短期大学, 2) 県立広島大学健康科学科

#### 【要約】

目的：我々は、薄力粉の懸濁液状態では、沸騰水浴中で抽出されていたスターチリピドのリゾレシチン(LPC)が、粘度上昇中の糊液では常温で多量に抽出されるようになり、最高粘度に達した後の糊液では再び熱抽出のLPCが増加するという現象を初めて見いたしました<sup>1)</sup>。今回は、この現象が小麦澱粉によるのかどうか調べた。

方法：小麦澱粉懸濁液の糊化開始・粘度変化・ゲル化過程における脂質分析の試料調製には、ラピッドビスコアナライザーを用いた。キャニスターに26gの水と小麦澱粉4g加えた。40°Cで5分間保持した糊液、60°C、80°C及び90°Cに達した時点の糊液、95°C5分間及び50°C5分間それぞれ保持した糊液が試料として採取された。試料の脂質は、既に述べた水飽和ブタノールによる常温及び熱（沸騰水浴中）抽出法で行った<sup>1)</sup>。

結果：生澱粉、粘度低下時の澱粉糊液及びゲル化した澱粉糊液におけるLPC量は熱抽出画分のほうが常温抽出画分よりも高かった。一方、糊化が始まる時点から粘度上昇時の澱粉糊液では、逆に、常温抽出のLPC量が上回った。生澱粉やゲル化した糊液より熱抽出したLPCのパルミチン酸の割合は37%と43%で、リノール酸の割合は49%と42%であった。ところが、粘度上昇時の糊液の場合は、パルミチン酸が53%と52%，リノール酸では30%と31%であった。これらの結果は小麦粉の場合と全く同じであった。従って、小麦粉におけるリゾリン脂質の動態は、そのまま小麦澱粉のリゾリン脂質の動態を反映していることがわかった。さらに小麦澱粉には存在状態が異なる3種類のリゾリン脂質が存在していることが示唆された。

1) 日本食品科学工学会誌, 57, 288 (2010).

キーワード：小麦澱粉、糊化、RVA、リゾレシチン

なお、本発表論文はFood Science and Technology Research 17, 311(2011)に「Distribution of Starch Lysophosphatidylcholine in Pasting and Gelation of Wheat Starch Suspensions」として掲載された。

## 第58回日本栄養改善学会学術総会

2011年9月8日～9月10日 国際会議場・広島市文化交流会館/アステールプラザ 広島市

### 脂質異常症の栄養指導におけるタイプ分類の検討

#### 【著者】

中田麻衣<sup>1)</sup>, 佐野尚美<sup>2)</sup>, 前田朝美<sup>3)</sup>, 国信清香<sup>4)</sup>, 加藤秀夫<sup>2)</sup>, 西田由香<sup>2)</sup>

1) 山陽女子短期大学, 2) 県立広島大学, 3) 東北女子大学, 4) 安田女子大学

#### 【要約】

**背景・目的：**脂質異常症は動脈硬化の進展を誘発し、心血管や脳血管疾患のリスク因子となる一方で、コレステロール値は高めの方が総死亡率は低いとの報告もあり、血中脂質の目標値や望ましい生活習慣のあり方については、現在さまざまな議論がされている。本研究では、脂質異常症を様々な視点から評価・分類し、効果的な予防・改善方法を検討することを目的とした。

**方法：**平成22年7月に行われた広島県E市の集団健診受診者のうち、本研究への同意を得た209名（男性67名、女性142名）の身体計測、血液検査値と生活習慣の関連を解析した。血液検査では、コレステロール分画検査による血中脂質の分析を行った。さらに、集団健診で脂質異常症と判定された者のうち、健康教室への参加と本研究への同意を得た35名を対象に、生活習慣と血中脂質の関連を分析し、行動目標のタイプ別に効果を検討した。

**結果・考察：**脂質異常症の出現頻度は42.1%（男性：44.8%，女性：40.8%）であった。男性は中性脂肪高値、女性はLDL-コレステロール高値の出現頻度が高かった。女性でLDL-コレステロール高値の者は菓子類の摂取頻度が高く、男性で中性脂肪高値の者は野菜の摂取頻度が低かった。また、女性は男性に比べて菓子類やパンを「週2～3回以上食べる」者の割合が多いなど、食習慣や嗜好と脂質異常症の関係には性差があることが分かった。これらのことから、より効果的な指導を行うためには、男女別の指導方法の確立が必要であると考えられる。脂質異常症の健康教室に参加した35名に対しては、約2週間の食事記録と活動調査に基づいた個別栄養指導を行い、行動目標を自己決定してもらった。行動目標や生活習慣のタイプ別にどのような行動変容がみられるか、血液検査結果への影響も併せて検討し、報告する予定である。

**キーワード：**脂質異常症、栄養指導、行動変容

〈研修会報告〉

## 広島医学技術専門学校同窓会 研修会

臨床検査学科 林田静枝

### はじめに

広島医学技術専門学校が平成21年3月に閉校し、38期卒業生の入会を最後に1460名の同窓生が入会されている。平成19年4月からは、山陽女子短期大学臨床検査学科として生まれ変わり、臨床検査技師をめざし、多くの学生が本学で勉学に励んでいる。

今回は研修会形式で同窓会を企画し、総会に引き続き、特別講演として「患者にとっての臨床検査技師とは～乳がん再発患者の立場から～」と題しNPO法人広島がんサポート副理事長の中川けいさんをお迎えし、患者さんから見た臨床検査技師に期待されていることなど、また、乳がん患者友の会きらら理事長としての活動をお話いただいた。

同窓生には、先輩後輩の各認定、資格などの紹介をしてもらいスキルアップを目指すためのアドバイスを聞き、今後の励みに、また、これから臨床検査技師を目指している学生の勉学には将来のダブルライセンス取得のヒントに、一般の方には臨床検査技師の認識・啓蒙になればとの思いで企画した。

主 催 広島医学技術専門学校同窓会

開催日時・場所 平成23年6月26日(日) 13時～16時

山陽女子短期大学科学館V L教室において総会に引き続き開催された。

開 会 の 辞 平田典子会長(3期)

飯山郁子学長

特別講演：「患者にとっての臨床検査技師とは～乳がん再発患者の立場から～

中川けい (NPO法人広島がんサポート副理事長)

講師の中川けいさんは、乳がんの手術、再発を体験され、患者の立場で臨床検査技師が検査は高い精度を求めるることは当然であるが、患者の気遣っての声かけをしていただいたことが心強くありがたかったと言われた。今回の講演を通じて、臨床検査技師が患者さまに求められている、あるべき姿を学ばせていただいた。

また、中川けいさんには、早期発見につながる、乳がん検診啓発キャンペーンを開催され、女性が検診を受けやすいクリニックを設立されている等、数々のがん撲滅に貢献されるご活躍に敬意をはらいたい。

## 同窓生発表

### 1題 NST : Nutrition Support Team (栄養サポートチーム)

森田益子 10期生 (安佐市民病院)

NSTの一員として栄養不良の患者さんのアルブンミン値で抽出し、他のデーターをそろえ、ラウンドカンファランスし、モニタリングに必要な検査のアドバイス等、医師、看護師、栄養士、薬剤師等と共にチーム医療の一端をない、自分自身の医療者としてのレベルアップにもつながったと思ったと話された。

### 2題 糖尿病療養指導士

高夫智子 7期生 (済生会広島病院)

急増する糖尿病患者の医師とともに専門性をもったコメディカルスタッフによるチームアプローチを行う。臨床検査技師の役割として患者満足度の高い療養指導を目指す必要性を感じ認定を取得され、糖尿病治療の一端を担い活躍されている。

### 3題 細胞検査士・学位を取得して

尾田三世 11期生 (広島大学病院)

細胞検査士の資格取得し、顕微鏡を覗き悪性細胞を捜す。医療従事者として役立っていると実感できる瞬間であると言われ、多くの先輩技師や仲間と技術、知識を高められ、また、自分自身の未熟さを感じ、大学院に進み学位を取られた。また、仕事に対する情熱や使命感、人としての誠実さを兼ね備えた多くの方々の出会いがあり、そんな方々に近づきたいと思っていると言われた。

### 4題 乳がん検診における乳房超音波検査

ハーリー弘子 19期 (広島原爆傷害対策協議会健康管理・増進センター)

近年、乳がん罹患率、死亡率は年々増加傾向にあり、検診における乳房超音波検査での死亡率減少効果を調べる検討が行われていないために、任意型の検診にとどまっている。現在、大規模な有用性検討がおこなわれている。今後検診における重要な役割が期待されることから、検査者の知識、技術の向上が求められ、需要の高い資格になるそうである。

### 5題 認定臨床微生物検査技師を目指して

田寺佳代子 24期 (国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター)

今日、医療関連施設における微生物検査の役割は、感染症の診断・治療において臨床が必要とす

る検査結果を迅速に報告すること、また、感染対策においても、医療チームの一員として活動が期待されている。受験資格は、微生物検査に5年以上従事し、筆頭学会発表3回以上、論文3編（うち1編は筆頭）の条件を満たされ、今年の試験に挑戦される。

#### 6題 認定輸血検査技師

笹谷真奈美 8期（J A広島総合病院）

輸血は移植の一種と考えられているように、種々の副作用・合併症を伴い易く、輸血治療を行うには深い知識、的確な判断力と技術が要求される。正しい知識と的確な輸血検査により、輸血医療の安全性向上と製剤の適正使用に努める技師の育成が目的である。医師、看護師と同様に認定臨床検査技師も安全な輸血治療の遂行のため、臨床とのコンサルテーション、後輩の教育等、重要な役割を担い活躍されている。

#### 7題 博士号・第45回小島三郎記念技術賞・ISO15189審査員

松原朱美 5期生（広島大学病院）

国際学会・研修会など140題、論文40編など多くの学会、研修会で活躍され、「広島県臨床生化学研究会もみじ会」を主宰された。また国内のみならず、アジア圏基準範囲設定プロジェクト等にも参画されている。“予防医学”をテーマに生理的変動幅を利用した保健指導に関する新指標を考案された。多くの業績を評価され「小島三郎記念技術賞」、「文部科学省医学教育関連業務功労賞表彰」を受賞された。日本臨床検査技師会の推薦でISO15189「臨床検査室—品質と能力に関する特定要求事項」技術審査員とISO9001審査員と多くの表彰、資格を得られて活躍されている。これらは多くの方々やまた家族の支えがあり、巡り合いと幸運の賜物と話された。

#### 8題 園芸療法士

平田典子 3期（医療法人せのがわ）

臨床検査技師を退職され、専門学校に通い園芸療法を学ばれ、障害や社会的ハンデ一キップをもつ人に対象者に合わせ、医療スタッフや生活支援スタッフと情報交換しつつ、生きた植物を扱い、また、その生産物を利用してリハビリテーションと生活の質の向上を目的とされていて、収穫物を調理や季節行事には趣味の大工仕事や手芸も役だっているそうである。自然の中でパワフルに活躍されている姿が浮かんできそうである。

編 集 委 員

石 永 正 隆 (委員長)

岡 本 賢 二

高 田 晃 治

寺 岡 千恵子

浦 崎 順 子

## 山陽女子短期大学紀要 第33号

---

平成24年3月31日発行

編集者 山陽女子短期大学紀要委員

発行者 山陽女子短期大学

〒738-0003 広島県廿日市市佐方本町1-1

電話 0829-32-0909

印刷所 新和印刷有限会社

〒733-0012 広島市西区中広町1丁目5-17

---

第三十三号 平成二十四年

山陽女子短期大學紀要

## 学童疎開小説論

### —疎開文学論ノート③—

丸川 浩

はじめに

東日本大震災後、特に福島第一原発の事故以来、すでに死語、あるいは歴史的用語となっていた「疎開」という語が、一時的にではあつたが、復活した。<sup>(1)</sup> 災害時にしばしば使われる「避難」という語だけではなく、「疎開」という特殊な語が使用されるところに、原発事故とそれがもたらした状況の深刻さが表れていると言えるだろう。

今回の原発事故とその後の推移は、日本国民すべてに何らかの不安や苦痛を与えていたと言つてよいが、もちろん、最も苦難を強いられているのは、福島県の人々であることは言うまでもない。とりわけ、この先放射能の影響が憂慮される子どもたちにとつて、事態は最も深刻である。

震災と原発事故から五ヶ月以上経った二〇一一年八月一七日に、東京永田町の衆議院第1議員会館で、福島から来た四人の小中学生が、

原子力災害対策本部など政府担当者十名に自分たちの思いを伝える集会が開かれた（「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」主催）。集会では、子どもたちの様々な要望、疑問、不安が政府担当者にぶつけられたようだが、その中で、私が気になったのは、集団疎開の実現を求める意見があつたことである。「アエラ」（二〇一一年九月五日）の記事によると、「政府側と話す中で、子どもたちからは友達とずっと一緒にいられるように、学校や学年ごとの集団疎開を実現してほしいと繰り返し伝えられた」という。この要望に対し、政府担当者は、「子どもたちの質問をはぐらかす紋切り型の回答に終始し」、子どもたちに不満と不信感を残すだけで終わつたようである。

政府担当者の対応の悪さは、いつもどおりのことだが、集団疎開の実現を求める子どもたちの声にも少なからず危惧を抱かざるを得ない。放射能の影響に怯えながら生活しつつ、他の土地の学校への転校が相次ぎ、クラスメートが離れ離れになるという状況の中、安心できる土地で、友達と一緒にいるために集団疎開の実現を求める子どもたちの気持ちには切実なものがあり、それを否定したいわけではないし、また、否定できるものでもない。しかし、特定の地域の学校、学年で集団疎開（それを子どもたちが具体的にどのようなものと捉えているのかは不明だが）が実施されたとして、それが子どもたちに平穏をもたらすとは限らないだろう。もちろん、原発事故以前の状態に戻すこと以外に真の平穏はあり得ず、それが現時点で不可能な限り、集団疎

開という方策もあり得るとは思うが、それはそれで、子どもたちに新たな苦痛を与えてしまう可能性も大きい。

周知のごとく、アジア・太平洋戦争末期に、都市の小学校（当時は国民学校）では、空襲から守るという名目で、学童の疎開が「勧奨」された。当初は、縁故疎開が奨励されたが、一九四四（昭和一九）年六月に閣議決定された「学童疎開促進要綱」では、「学童を縁故先へ疎開させることを勧奨し、縁故先のない学童にたいし集団疎開をさせること方法」をとつた。ここに、縁故疎開か集団疎開かのどちらかで、都市から地方へ学童が分散するという事態が出現するのである。学童疎開は、空襲から子どもたちの生命を守るという人道的目的だけでなく、戦争継続のための人的資源の温存、防空対策上の支障の排除など、戦争遂行のための施策でもあつた。学童疎開の功罪については議論の分れるところだが、空襲から多くの子どもたちの生命を救つたという事実は認められるとしても、学童疎開体験者の多くにとつては受難の体験、だつたことも事実だろう。そして、後に、主として学童疎開体験者によつて、多くの学童疎開小説が書かれることになる。

戦争文学について論じられることは多いが、学童疎開小説が論じられるることは極めて少ない。総力戦であつたアジア太平洋戦争においては、学童疎開は、子どもたちにとつては△戦争▽であつたにもかかわらず。本稿では、戦時下にあつた歴史的事実としての学童疎開が、小説にどのように描かれたのか、敗戦直後の学童疎開小説、体験者の学

童疎開小説、非体験者の学童疎開小説の順に考察する。また、学童疎開体験者の学童疎開小説については、学童疎開の三つのパターン、すなわち集団疎開、縁故疎開、疎開残留組に分けて論じてみたい。

### 一 敗戦直後の学童疎開小説

学童疎開体験者による学童疎開小説は、彼らが自らの体験を小説化できるための時間を要した。それらが描かれるのは、一九六〇年代以後まで待たなければならなかつた。しかし、それまでに、疎開を体験した既成作家による学童疎開小説はあつた。ここでは、まず、敗戦の翌年に発表された林芙美子の短編小説「放牧」（一九四六年五月、「別冊文藝春秋」）を取り上げたい。

この小説は、疎開先の長野県下高井郡角間温泉で、集団疎開学童や引率教員たちと交流した体験をもとに描かれた小説である。ほぼ同時期に発表された隨筆風の小説「作家の手帳」（一九四六年七月～一月、「紺青」）にも、集団疎開学童や引率教員、寮母との交流が描かれていて、「放牧」に登場する教員のモデルも出るし、人物は違つているが同じ出来事も語られている。川本三郎も指摘するように、林芙美子の作品は、「どこまでが小説なのか、隨筆なのか、定義するのが難しい」<sup>(4)</sup>が、「作家の手帳」の方に事実を描いた隨筆的要素が強いと認めてよいだろう。そこで、「作家の手帳」を参照しながら、さらには

歴史的事実も考慮に入れつつ、「放牧」で、林芙美子が集団疎開をどのように描いたか、見てみよう。

「放牧」は、長野駅から電車で一時間、そこから歩いて四キロにある温泉部落に、東京の国民学校の学童二百人が集団疎開でやつて来た日から始まっている。時期は五月。何年とは書かれていないが、一九四五（昭和二〇）年であることは、東京や各地の空襲の状況から分るように描かれている。従つて、この学童たちは、一九四五年三月に閣議決定された「学童疎開強化要綱」によつて学童疎開が徹底化されて以後の集団疎開組ということになる。さらに、「作家の手帳」を参照すれば、疎開して来た学童は、東京都葛飾区の国民学校児童らしい。学童疎開の「勧奨」が始まつた当初の一九四四年七月に、東京都教育局が起案した疎開児童目標数では、葛飾区は丙地区（疎開対象児童の二〇%を集団疎開児童目標とする）に指定されていて、親や本人の希望で「勧奨」に従わない残留組も多かつた地区だつた。<sup>(5)</sup>しかし、空襲が現実化し、大都市の食糧不足が深刻化する中で疎開の徹底が行われた結果、強制的に連れて来られたのが「放牧」の児童たちなのである。

この小説の題名である「放牧」は、「作家の手帳」の中の「子供の親たちは、丁度仔馬でも放牧するやうな気持ちで山へ行く子供達を上野駅へ見送つて行きました」という箇所に見出される親たちの思いに由来すると考えられるが、親たちは、そのような牧歌的な気持ちで子

どもたちを見送つたわけではなかつたろう。そこには、恐らく林芙美子の児童たちへの眼差しが投影していると考えるべきだろう。

もうしばらく、「作家の手帳」の記述を参考しておけば、二年に渡る疎開生活に疲弊し、「終日洞穴」のような心で暮らしている「私」（＝林芙美子）は、子どもたちを目にして、「こゝろは急に生々と燃えはじめ」、「この東京の空気を身につけてはるばると疎開して来た子供達に愛情をそゝぎ始め」。つまり、「私」は、東京から来た子どもたちとの交流に、心の救いを求めたと考えてよい。もちろん、飢えと望郷の念に苛まれた子どもたちの悲惨な境遇は描かれている。しかし、「私」（＝林芙美子）の眼差しは、悲惨さに向うよりも、子どもたちの健気さの方に向つていて、そこに確実に漂つているのは哀感である。敗戦を迎えて、「私」は、「疎開の子供たちも、いよいよ、この山での童話は終りになりました」と書く。集団疎開を「童話」と見る眼差しと、疎開児童を「放牧」された「仔馬」と見る眼差しはつながつていて、集団疎開という歴史的事実に対して、疎開中の自分の境遇と重ね合せつつ、林芙美子の疎開学童に向けられた眼差しは、同情に満ちている。

さて、小説「放牧」であるが、この小説は、「作家の手帳」ほど「童話」的雰囲気は濃くない。主要な登場人物は、六年生の半田駒吉、四年生の木島丈助、引率教員の大木先生であるが、彼らは、受け入れ側の地元の人々から冷遇を受け、飢えに苛まれ、東京に戻りたい気持

ちが抑え難い、過酷な疎開生活を続ける。なかでも駒吉は、小さい学年食べ物をかすめとするような悪童で、丈助を誘つて、東京に帰ろうとするが、一度目は、長野駅でつかまり、連れ戻される。しかし、自分も帰京したい気持ちがある大木先生は、二人を叱らない。二度目の脱走を一人で行つた駒吉は、飲まず食わずに無切符で家に帰り着く。「作家の手帳」の重吉が駒吉のモデルだが、重吉は脱走を試みるが失敗し、諦める。その点では、駒吉の方が逞しく描かれている。

学童疎開小説として見たときに、この小説の最大の特徴は、同じ温泉に、山川学院という金持の子女が通うらしい私立学校の学童も疎開してきていて、国民学校の学童たちとの落差が描かれていることだろう。山川学院では贅沢な食べ物が供せられていて、村の有力者たちを招いて学芸会も行う。学芸会では、女教師も化粧をしていて、そろいの紫の校服を着ている。このあたりの作者の筆致は嫌悪感にあふれて辛辣である。それに対して、脱走した駒吉と丈助を連れ帰るときに、国民学校の教員である大木に、次のように思わせている。「大木先生は、山川学院の子供達にくらべて、捨身で生きてゐる自分の学校の貧しい子供達がいぢらしかつた。かへつて、自分の学校のやうな処から偉い奴が生れてくるだらうとも思へた」と。これは大木先生の思いといふよりも、根っからの庶民だつた林芙美子の思いであつたろう。

この小説では、配給物をそれぞれの部署でピンはねするなど、受け入れ側の地元の対応への不満も描かれている。それは、窮乏生活を強

いられた林芙美子自身の不満が投影しているのであろう。ただし、地元民の側の不満も描かれていて、疎開学童を迎えてきた男は、「二百人の子供を割りあてられるといふ事は、食糧の方がつゞくかどうかと心配でしてね」と、大木先生に話したりする。決して好意的な描かれ方はされていないが、しかし、受け入れ側としては眞実のことばでもあつたろう。板垣邦子『日米決戦下の格差と平等 銃後信州の食糧・疎開<sup>(6)</sup>』に見られるように、当時、疎開受け入れなどが重荷となつて、信州の食糧事情は逼迫の度合いを増していたからである。学童疎開小説全般に言えることだが、地元民は悪く描かれることが多く、「放牧」も、その例外ではない。

空腹、家恋し、脱走、地元民との軋轢など、「放牧」には、後の学童疎開体験者たちが描くことになる小説の題材がほとんど出揃つているが、いじめ（集団疎開の場合は疎開学童の間の、縁故疎開の場合は地元学童との間の）は描かれていない。確かに、駒吉は下級生の井の飯をかすめとするような悪童に違いないが、陰湿ないじめを行つてゐるわけではない。林芙美子は、東京の風をもたらした貧しい家の子どもたちに、同じく東京を離れて暮らす疎開者としての心の「救い」を求め、疎開児童たちの健気な姿を描こうとしただけで、学童疎開の実態を描こうとしたわけではなかつただろう。学童疎開の実態が描かれるためには、やはり、それを体験した学童が成長するまで待たなければならなかつた。

## 二 学童疎開体験者の学童疎開小説

(一九六六年一一月、講談社)<sup>(8)</sup>の「初版あとがき」で、次のように書いてある。

学童疎開体験者による本格的な学童疎開小説が描かれるようになるのは、すでに触れたように、一九六〇年代後半になつてからのことである。学童疎開体験者で、当時、国民学校の六年・五年生であつた世代は、一九三三（昭和七）年・一九三八（昭和八）年生まれである。彼らは、国民学校上級生であつたために、その下の世代よりも過酷な

学童疎開体験を強いられることになつた世代である。一九三二年生まれで集団疎開体験者の小林信彦は、ノンフィクション『少年の観た△聖戦▽』（一九九五年五月、筑摩書房）で、「集団疎開において、どのような体験をしたかは、その人の性格や年齢によつて異なる」と書き、「ぼくの知る限りでは、たいていの人が『つらかった』『苦しかった』というが、それは六年生だからであつて、三年生の場合は『毎日が遠足のようだつた』と回想する者がいる」として、集団疎開体験に関して「一般論といふものはない」と書いている。「性格」の問題は、とりあえず置くとしても、集団疎開の場合、上級生であれば、下級生の管理の一端を担うことを引率教員からも期待され、しかも、それなりの自我も芽生え始める年齢であれば、無邪気に集団生活を喜ぶような心境でいることはできなかつたのだろう。

一九六〇年代後半は、三二年、三三年生まれの世代が二十歳代後半から三十歳代前半に至る時期である。小林信彦は、『冬の神話』

集団疎開に参加させられた少年たちの中で敏感な魂の持主は、この世の地獄を見たはずだ。想起するだけで首筋が熱くなるような屈辱感にとらわれて私は長い戦後を生きてきた。二十年以上たつた今、ようやく、あの異常な体験を、とり乱すことなしにファイクション化し得るような気がする。

少年期の過酷な体験を小説化するためには、一定の歳月を経る必要があることは言うまでもない。大人として軍隊を経験した世代が、それを小説化するのとは事情が違うわけである。実際、一九六〇年代に入つて、ようやく学童疎開体験者による優れた学童疎開小説が発表されるようになる。代表的な作品を挙げれば、六三年には、宮原昭夫（一九三一年八月生まれ）の『ごつたがえしの時点』、六六年には、すでに触れた小林信彦（一九三二年一二月生まれ）の『冬の神話』、六八年には、高井有一（一九三二年四月生まれ）の『少年たちの戦場』、六九年には、柏原兵三（一九三三年一一月生まれ）の『長い道』が刊行される。そのうち、『ごつたがえしの時点』は疎開残留組を描いた小説で、しかも、それは第一章に相当し、第二章、第三章は戦後の話である。また、『冬の神話』、『少年たちの戦場』は集団疎開を描いた小説、『長い道』は縁故疎開を描いた小説である。

もちろん、これらの作家は、学童疎開小説だけを書いた作家ではな

い。個人的な体験としても、歴史的事実としても、書いておかなければならぬという衝動が、学童疎開小説を書かせたのである。小林信彦は、早くも一九五四年頃に集団疎開の小説を構想している<sup>(9)</sup>し、柏原兵三の『長い道』は、一九五九年から同人誌『運河』に五号にわたつて掲載された小説（未完）をもとに完成された小説である。彼らは、学童疎開体験から十数年も経ない時点で構想を抱いている。学童疎開体験に対する固執がうかがい知れるであろう。

これらの作家の中で、三つの学童疎開小説を発表している点で、小林信彦が注目される。小林信彦は、長編小説『冬の神話』と長編小説『東京少年』（二〇〇五年一〇月、新潮社）の第一部で集団疎開を、短編小説「パパ、戦争でなにしてたの？」（一九七五年四月、「海」）で集団疎開の再々疎開を、『東京少年』の第二部で縁故疎開を描いている。さらに加えれば、学童疎開小説ではないが、長編小説『ぼくたちの好きな戦争』（一九八六年五月、新潮社）では、作者と年齢、境遇が近似している登場人物・誠は、疎開残留組に設定されている。つまり、小林信彦は、集団疎開、縁故疎開、疎開残留組という三つの学童疎開のパターンを小説に描いていることになるのである。こういう作家は、他に例がない。そこで、以下、小林信彦の小説を中心にして、適宜、他の作家の小説にも触れながら、学童疎開の三つのパターンがどのように描かれているのか見ていくことにしよう。

### 集団疎開

まず、集団疎開を描いた『冬の神話』だが、この小説は、戦後二十一年以上が経過して、集団疎開という歴史的事実が、初めて集団疎開体験者によって、本格的に描かれた長編小説であるという先駆性を持っている。その意味では、戦争がもたらした異常な状況に叩き込まれた少年の体験の記録小説とも言い得る。食料不足がもたらす極度の空腹、仲介者による食料のピンはね、引率教員と寮母・作業員の役割など、「私」の側の視点から記録されているが、すべての集団疎開に当てはまるとは言えないにしても、集団疎開の実態を正確に伝えている。中には、一般には実情が余り知られていないかった女子児童間の性病感染の蔓延<sup>(10)</sup>（浴場による感染が多かつたらしい）の実態も記述されており、この小説が資料的な検証に堪える記録性を有していることを示している。もちろん、『冬の神話』は、小説として構想され、書かれたものなので、人物設定や出来事の中にフィクションは交えられている。例えば、小説の中では、一九四五年三月の空襲で、父親が死んだことになつていて、最後に、疎開先に母親が迎えに来るが、事実は、小林信彦の父親は生きていて、迎えに来るのも父親である。そして、記録や手記ではなく、小説として書かれている以上、歴史的事実を描くことよりも、それを体験した個人の内面的真実が描かれることに主眼があつたと考えるべきだろう。

主人公「私」の内面を決定づけているのは、次のような性格である。

私は、周囲に人がいると、一行の活字すら頭に入らぬ質であつた。：（略）：そういう私にとつて、観覧自由の生活、ガラス張りの毎日、樂屋のない日常の連続というのは、おそろしい責苦であつた。

樂屋さえあたえられれば、そして、そこで一日の何分の一かを過ごすことを許されるならば、私は、かなり愛想のいい「愉快な奴」になれる自信があつた。が、樂屋を持たぬ私がどんなに不様な眺めかを私は知つていた。それは巻貝からほじくり出されたやどかりみたいなものなのだ。

このような性格、感受性を持つた少年が、長期間の強制された集団

生活に苦痛を抱くのは当然のことだつたろう。しかも、信じていた級友からも裏切られ、暴力と奸智が支配する閉鎖的集団の中で、級長としての権威は失墜し、屈辱感と孤立感はますます高まつていく。山田智彦は、「『冬の神話』の主題は、主人公の少年が毀されてゆく過程を描くことにある<sup>(1)</sup>」と指摘しているが、この小説は、少年の内面がぼろぼろに崩壊していく経緯を緻密に描いた小説だと言える。そして、その崩壊は、特殊な状況下に置かれた集団にいることによつて起こるのである。

おそらく、どんな異郷にあつても、平時の集団の秩序がそのまま維持されている限りは、東京恋し、父母恋しという哀しみはあつても、感受性の鋭敏な学童の内面を崩壊させるほどの苦痛は与えないはずで

ある。しかし、『冬の神話』で描かれているのは、平時の学校の秩序を失つた集団である。それは、力関係の変化に端的に表れている。この集団で、権力を得るのは、暴力で支配するブリキ職人の子・浅田と、する賢さと扇動的言辞で支配する非国民の家（闇カフエー）の子・青木である。そして、彼らに追従する取り巻きも形成される。老舗の和菓子店の子で、級長でもある「私」は、「ここは東京ではない。私の家の『老舗の権威』も、学校の成績も、通用しない場所なのだ」と意識する。こうした力関係の転倒を、最もよく示しているのは、「私の親友で特高刑事の子・守谷が、非国民の家の子・青木に打たれる場面」だろう。

青木は守谷を腹這いにさせると、「精神棒」と称するすりこぎで、尻を激しく打つた。それは異様な眺めだつた。非国民がトツコーの子を拷問しているのだ。

このように、平時の秩序が失われ、力関係が転倒した集団は、一般社会（軍隊用語で言う「地方」）の身分や職業、地位が通用しない軍隊の内務班に酷似していると言えよう。実際、小林信彦は、『一少年の観たへ聖戦▽』の中で、集団疎開時のいじめについて語り、「はるかのちに野間宏の『真空地帯』その他を読んでわかつたのだが、埼玉県の小さな寺の中でくりひろげられたドラマは、日本の軍隊におけるしごきの縮小版だつたのである」と書いている。つまり、小林信彦は、疎開した集団の中に、軍隊の兵営（内務班）と同質の陰湿さを見出し

ていいのである。『真空地帯』が、軍隊という「特殊ノ境涯」をとおして日本社会の縮図が描かれていると考えるならば、小林信彦も、『冬の神話』で集団疎開を通して描いたのは、日本の集団の特質が凝縮された様相だつたのではなかろうか。『一少年の観たへ聖戦▽』では、「日本的なムラ大きい、左右を問わず徒党がきらいになつたのは、この時の体験（集団疎開体験＝引用者）からである」とも書かれているように、疎開体験がもたらした集団への不信感は、小林信彦の戦後の生き方に決定的な影響を与えたのである。

『冬の神話』からほぼ四十年後の二〇〇五年一〇月に刊行された長編小説が『東京少年』であり、その第一部は、『冬の神話』の書き換えて作である。『東京少年』では、『冬の神話』と重なる話も多く、表現もそのまま使つてゐる箇所も多い。例えば、すでに引用した「やどかり」の箇所や、「非国民がトツコーの子を拷問している」箇所など、表現もほとんど同じになつてゐる。また、『東京少年』では、いじめなどの「体験を書く気はあまりおこらない」としながらも、結果的に、それらの体験も描かれている。ただし、『冬の神話』のような、主人公の屈辱感を息苦しいほどに微細に描くような筆致は避けられていて、『冬の神話』が、「私」の内面をたどることを中心にして描かれていたのに対しして、『東京少年』では、戦時下の状況、特に日本軍の戦況の推移とその報道の欺瞞に、相当、筆が費やされている。

それを可能にするために、作者は、早坂という友人を設定している。

早坂は、兵器マニアで「博士」と仇名されるくらい戦況分析に明るい少年である。『冬の神話』では、小沢という少年がいて、父親が警防団の顔役で、時に戦況に対する鋭い見方を示す点では早坂と共通性があるが、剽軽さの裏に陰険さを持つた少年として描かれていて、人物像はかなり違つてゐる。どちらの人物が、現実の人物に近いのかは不明だが、とにかく、多くの場合、早坂の説明によつて、新聞や噂話が伝える日本軍の戦況の虚偽が暴かれることになるのだから、早坂は、日本軍の戦況の推移を描くためには、この小説の中で極めて重要な役割を担つてゐる。

『冬の神話』の書き換え作として『東京少年』第一部が描かれた意味について、坪内祐三は、「戦時下にあつてメディアや権力者たちに翻弄されて行く人々の姿を正確に描くこと、それが戦後六十年の年に刊行されたこの『東京少年』の主眼なのだ」と指摘しているが、『東京少年』の第一部は、戦争や疎開を知らない世代の読者に集団疎開の実態を伝える（そのため『冬の神話』よりも、説明的叙述が多い）とともに、戦争遂行者やマスメデイアの伝える情報が、いかに国民を瞞着するものであつたかを告発（と言うほど声高なものではないが）する小説となつてゐる。

『冬の神話』と『東京少年』の間に当たる一九七五年四月に発表されたのが、短編小説「パパ、戦争でなにしてたの？」である。この小説は、作者自身が失敗作と見なしているらしく、単行本に収録されて

いないが、学童疎開小説の中では、特異な小説である。なぜなら、この小説は、小林信彦自身が体験していない、集団疎開が行き着く先の極限状況が、△想像力▽で描かれているからである。

東京の下町から都下北多摩郡東村山に集団疎開した「私」は、空襲で肉親を失つて迎えが来ない四人の一人となる。四人は、引率教員とともに、「裏日本の、米子に近い坂井港町」に再疎開するが、さらに、保田という村落に再々疎開することになる。彼らは慢性的な飢餓状態にある。そこに東京下町生まれという謎の少年（「カラス」と仇名されるようになる）が合流する。「私」の発案で、糠蝦を盗みに行くことになるが、事前に察知されて失敗に終わる。翌々日の朝から、「私は、他の三人から除け者にされるようになる。カラスの中傷のせいだと考えた「私」は、三人にカラスが東京者でないことを証明することによって納得させる。三人は、カラスを追及しようとするが、カラスは、お好み焼きを食べさせるという懷柔策で切り抜ける。その後も、カラスは餅を食べてしたりして、飢えた四人の憎しみを受ける。しかし、四人が制裁を加えようとした朝、カラスは逃げ去つていた。

現実に、東京都下東村山に集団疎開した学童が、遠く離れた山陰に集団で再疎開するようなケースがあつたとは考えられないでの、ここに描かれているのは、極度の飢えに苛まれつつ、統制も何も失つた想像上の疎開集団（もはや集団とは言えないが）の絶望的な極限状況である。戦争小説で言えば、敗残兵たちがレイテ島の山中を彷徨する大

岡昇平の『野火』の世界を想起させるところもある。小林信彦は、意識的に、東京から僻遠の地に集団疎開の再々疎開を設定しているのである。ある意味では、この極限状況は、『冬の神話』よりも一層陰惨な地獄の様相を呈している。それは、謎の少年・カラスが、実は「私」であつたことを暗示して終わるからである。

この小説は、娘の作文の宿題のために、「私」が疎開体験を語るという設定となつていて、右に記した概略は、「私」の語りの部分である。小説は、娘の作文を読んだ担任教師からの手紙で終わるが、教師は、カラスは「私」自身の過去の姿ではないか、と想像するのである。教師の想像どおりだとすれば、カラスという少年は、現実には存在せず、仲間を裏切り、陥れたのは「私」だということになるだろう。『冬の神話』の「私」も、青木を陥れるために、浅田の文鎮を青木のトランクに隠すといふこともするが、基本的に、仲間から陥れられる側の人間として描かれている。「パパ、戦争でなにしてたの？」のカラスは、明らかに陥れる側の人間であり、そのカラスが、語り手の「私」のことだとすれば、陥れるカラスと陥れられる「私」の境界は分明でなくなり、そこに浮かび上がつてくるのは、人間不信の無限地獄だけである。もちろん、『冬の神話』でも、すでに人間不信は描かれていたのだが、「パパ、戦争でなにしてたの？」では、△想像力▽で、作者の実体験を超えた、その極限まで描こうとしたのである。

ここまで見えてきたように、小林信彦の集団疎開小説には、集団への

嫌悪、そこから生じる極度の人間不信が描かれている。『東京少年』第一部でも、メディア不信の方に力点が移動しているだけで、基本的には同じである。ただし、ここまで言及しなかつたことだが、小林信彦の集団疎開小説には、東京の下町からの集団疎開という特殊性が色彩濃く投影している。この集団は、日本橋区（当時）という土地柄からか、妙にませた子どもが多いうえに、お互いの行動に干渉し合う息苦しい空気を持つている。もちろん、それは東京下町の子どもたちだけにあることではないだろうが、同じ東京でも、山の手や西の郊外の子どもたちの集団とは異質なところがあることも確かである。

高井有一の『少年たちの戦場』<sup>(15)</sup>は、「東京西郊に校舎を持ち、主に中流家庭の子弟を預かる私立校」の集団疎開を描いた長編小説だが、少年たちの人間関係がもたらす息苦しさは希薄なのである。暴力によるボス支配もなければ、陰湿ないじめもない。しかも、ここでは飢えさえない。それは、有力な父兄からの食糧斡旋があつたからで、空襲の激化した後は途絶えがちになつて食糧事情は悪化するが、それでも、『冬の神話』に描かれたような極度の飢えはないのである。それでは、この小説には、楽しい集団疎開生活が描かれているかというと、もちろんそうではない。この小説には、戦時下という状況の中で、集団疎開によつて、突然、家族から切り離された少年の日常性の喪失感と孤独感が、抑制された感情をとおして描かれているのである。

そのことは、主人公冰川が、空襲で焼けた家の焼跡に行きたいと引

率教員に申し出る場面によく表わされている。「行つてどうするんだ」と訊く教員に対し、「ええ、あの、見たいんです」と答えて、冰川は言い淀む。言い淀んだのは、説明しても、教員には分らないだろうと思つたからである。冰川は、焼けた家の庭の花壇が見たかつたのであり、「ダリアの球根を埋めたままにして来たが、焼けた土の中でも、それが生きてゐるかどうか知りたかつた」のである。冰川が、ダリアという些細なものに固執するは、それを見ることによつて、まだ残されてゐるかも知れない日常性を確認したからだと考えてよい。しかし、それは他の誰にも理解してもらえない感情なのである。この小説は、集団疎開の陰惨な側面は抑えられているが、「肉親と離れてむきつけの孤独と顔を合せねばならなかつた日々」（作者の「後記」）の感情を緻密に描いた小説なのである。

なお、集団疎開小説として見た場合、『少年たちの戦場』の大きな特徴は、引率教員・五代の疎開日記が引用されることによつて、教員の側の視点が挿入されていることである。五代は、小林信彦の集団疎開小説に出てくる暴力的で強圧的な教員と違つて、良心的な教員で、教員側の無力感や苦痛が日記をとおして見えてくる仕掛になつてゐる。

### 縁故疎開

すでに述べたように、『東京少年』の第二部は、縁故による再疎開体験を描いてゐる。小林信彦の再疎開は、一九四五年四月に入つてか

らで、新潟県新井町（現・妙高市）の遠戚の縁故によるもので、高田中学（旧制）に転入（元来は東京高師付属中に入学が決まっていた）している。「高田市の中学ではいじめもなく、友達もすぐにでき」（『一少年の観たへ聖戦』）たらしく、集団疎開の時のような「この世の地獄」とは違った体験になつていて。そのため、『東京少年』の第二部は、帰京への思いと、それを拒む無力な父親への不信と反発を中心とした家族の物語となつていて。第一部よりも暗さがないのは、集団疎開にはなかつた「逃げ場」があつたからで、「一人で親戚に個人疎開をしたとすれば、それはそれで辛い目にあうらしく、そうした例は何度もきいた。しかし、幸い、ぼくの場合は、家族ぐるみの疎開だつた」からである。

ゆりはじめは、「最も精神的苦痛を味わつた疎開のパターンは、私の考えでは集団疎開ではなく、縁故にたよつて父母の故郷に入つたものたちであつた。ひとくちにいうならば、集団の構造をそのまま都会から農村に移り住んだのと、日本の村の掟のなかにひとり裸のまま放り込まれたとの相違である<sup>(17)</sup>」と指摘しているが、疎開状況や学童の性格によつて違いがあつて、一概には言えないだろう。小林信彦の場合は、集団疎開という特殊な状況に置かることによつて集団の構造に変化が生じ、そのことが精神的苦痛を与えている。従つて、集団からの「逃げ場」のある縁故疎開は、苦痛の少ない体験となつたのである。

ところで、縁故疎開が少年の心に傷を与える様子を描いた学童疎開小説に、柏原兵三の長編小説『長い道』<sup>(18)</sup>がある。小林信彦の縁故疎開は、学童とは言えない中学生の疎開なので、国民学校五年から六年の一年半にわたる縁故疎開を扱つた『長い道』も見ておこう。

主人公の「僕」は、東京都四谷区に家があり、父親は高級官僚。一年生からずつと級長を務めてきた優等生で、級友と別れるのが辛さに、集団疎開を希望していたが、結局、縁故疎開で、父親の郷里である「北陸の日本海沿いの半農半漁の舟原村」の伯父（祖母もいる）に疎開する。「僕」の通学する舟原国民学校五年男組の級長竹下進は、成績優秀で家の仕事も手伝う少年で、部落の大人からも教師からも信望を得ている。しかし、実は、学級の児童からは、腕力と知力で恐れられる暴君で、「僕」は、進の機嫌次第で、学級の児童皆から除け者にされていることを知る。「僕」は、進に追従することで自尊心を傷つけられ、屈辱的な日々を送ることになるのである。

題名となつている「長い道」とは、家から学校までの三キロの通学道を意味している。「僕」は、毎日の行き帰りの「長い道」で、除け者にされたり、進のための語り部をやらされたりして、屈辱を与えられ続ける。同級生たちを避けて一人で通学できないのは、同じ地区の同級生は待ち合わせて、「勢揃いして行くというのは犯すべからざるこの土地の掟」だからである。さらに、「僕」の苦痛は、除け者にされているという惨めな事実を、人に見られたくないという自尊心から

も生じている。

伯父や伯母、祖母もいて、土地の大人からは、村の出世頭の息子として敬意を持つて見られるという環境は、恵まれた環境と言うべきだが、かえつて、そのことで、優等生である「僕」は、いじめられているという事実を大人の誰にも伝えられないでのある。また、伝えたとしても分つてもらえるとは思つていない。教師ですら閑知しない子どもたちだけの世界のことだからである。

子どもたちの世界に君臨するのは進である（後に権力は失う）が、この小説では、進の内面は一切描かれていない。従つて、集団の中では暴君として「僕」を除け者にしながらも、個人として接する時には友人のような振舞いを見せる進の行動の理由は、進の側からは理解し難いが、東京に帰った後の「僕」の考え方から推察できる。「僕」は、こう考える。「進にとつて僕は闖入して来た異物のような存在だったのではないだろうか、彼の君臨していた秩序は、僕の闖入のために乱され、……（略）：彼は僕に自分の力を誇示するために、必要以上に権力を振るつた」と。

ゆりはじめは、『長い道』を論じる中で、「子供たちの世界はそのまま、田舎の共同体が持つ意志であつて、それが奥底で疎開者を拒むのは大人の社会の直接的な反映である」<sup>(19)</sup>と書いているが、進はまさに共同体の意志を体現した少年ではなかつただろうか。その意味では、大人の社会よりも子どもの世界の方が、一層露骨に、共同体にとつて異

物である疎開者を排除する実態を描いたのが、この小説であると言えよう。

### 疎開残留組

『東京少年』のほぼ二十年前に発表された長編小説『ぼくたちの好きな戦争』は、すでに触れたように、学童疎開小説ではなく、へ喜劇的想像力／で描いた特異な戦争小説である。ここで注目したいのは、作者と年齢や境遇が近似している登場人物・誠を、作者自身の体験と異なる学童疎開残留組に設定していることである。結論から言えば、誠は残留組に設定されているが、作者が描こうとしたのは集団疎開の方にあつたと考えられる。誠の友人・仁は、集団疎開に加わっていたが、一ヶ月ほどで脱走して、東京に戻つてくる。親に見つかると集団疎開に連れ戻されると思う仁は、誠にかくまつてもらう。そこで、誠は、仁から集団疎開の実態を聞かされるのである。つまり、この小説では、集団疎開を、直接的に描くことを避けて、間接的に描いているのである。集団疎開を直接的に描けば、別の小説になつてしまふので、誠を残留組に設定せざるを得なかつたのだろう。戦争を喜劇的かつ多面的に描こうとした『ぼくたちの好きな戦争』においても、集団疎開の実態を組み入れようとするところに、小林信彦の集団疎開体験の重さが見て取れる。

疎開残留組の心の荒廃を描いた小説に、宮原昭夫の長編小説『ごつ

たがえしの時点<sup>(20)</sup>がある。全三章からなる小説だが、「第一章 幼い廃園」が疎開残留組の話である。

疎開が始まる前の時点から小説は始まる。主人公伊庭葉二は、国民学校の六年生。学校では、参謀総長大将役の少年が、将校やら下士官を任命するという、帝国陸海軍を模したリアルな「兵隊ごっこ」が行われている。身体も弱く、気も弱い葉二は、下級生を殴ることも出来ず、不甲斐ない自分を恥じている。おそらく、平時ならば、葉二も、周囲から単に気の優しい少年と見なされるだけだつただろうが、将来「立派な軍人」となることが期待される戦時下にあつては、日本男子にあらざる軟弱者と見なされ、当人も劣等感を持たざるを得ないのである。そこに、集団疎開の発表があり、葉二は、身体の弱い久保、小牧といつしょに残留組となる。葉二は、集団疎開が恐かつたのだが、「行かないことに決つたら、やはり自分は集団疎開さえ出来ないんだ、人並み以下だつたんだ」と氣落ちする。

残留組の学校生活が始まる。しかし、強者が集団疎開でいなくなると、久保と葉二が暴力で支配する側に立つことになる。弱者だけが集まつた残留組でも、抑圧構造が再構築されることになるわけである。下級生を殴つた葉二は、「立派につとめを果したようにほつとし」て、「おれは、もう、みんなと同じだ。日本男子、軍人精神、やまとだましい、ますらお」と思う。ここには、葉二の心の荒廃が表れていて、強者がいる間は日本男子失格の烙印を押されたが、弱者だけが残つた

集団の中では、さらなる弱者を虐げることによつて日本男子である自尊心を持つことができたというのである。これは心の荒廃以外の何ものでもない。作者が、残留後の葉二の変化を「幼い荒廃」と言い表している所以である。

疎開残留組は「棄民政策の犠牲者」と言う奥田継夫は、「学童疎開」といえば、集団が目立つて、縁故と残留からの発言が量的にも少ない。作品化されているのも何分の一かであろう<sup>(21)</sup>と書いている。その意味でも、『『こつたがえしの時点』は貴重な小説であろう。

#### 柳田国男『村と学童』

ここまで、集団疎開、縁故疎開、疎開残留組という三つのパターンの学童疎開小説を見てきた。どのパターンが最も悲惨だつたか決めようもないし、決めるべきことでもないだろう。小林信彦も言うとおり、疎開体験に「一般論というものはない」のである。体験者の学童疎開小説をとおして、今更ながらに確認し得たことは、個々の作家が自らの切実な体験を振り返り、学童疎開という歴史的事実を、個々の内面に生起した真実をとおして歴史的真実として定着し残しておこうとする作家の執念の存在である。小林信彦に、最もその執念が強く感じられたために、彼の小説を中心に論じたわけでもある。

さて、最後に、少し視点を変えて、本節の締めくくりとしたい。

民俗学者の柳田国男は、一九四五年の正月から書き始められた『村

と学童<sup>(22)</sup>を、敗戦後の同年九月に朝日新聞社から刊行している。その「はしがき」で、柳田は、「疎開学童の読物が足らぬと言うことを聴いて、どうかしなければならぬと思う者は多い」として、「次のようなことを心に置いて、新たにこの一冊をまとめてみた」と書いている。その始めの箇所を引用しておく。

まず第一には始めての土地に入つて、急に活き活きとして来た注意力と知識欲とをできるだけ一生のためになる方向へ働くかすよう、当人たちにも考え方付かることである。今までただ言葉としてのみ聴いていた観察とか理解とかいうものを、またと得がない今度の機会において、十分に体得させたいという願いを私は持つてゐる。

疎開学童の心構え、それへの願いとしては、至極真つ当なものには違いない。しかし、学童疎開体験者による学童疎開小説を読む限り、

学童疎開の実態からかけ離れたきれい事と思わざるを得ない。「始めたての土地に入つて、急に活き活きとして来た注意力と知識欲」を持って余裕のある状況でなかつたのが、多くの学童の実態だつたのではなかろうか。

疎開しなかつた（と言うよりもできなかつた）残留組は置くとして、まず、集団疎開の場合では、集団で固まつてゐるため、土地の人々との交流がほとんどなかつた。勤労奉仕という苦痛を伴う交流や土地の国民学校児童との公式行事での交流はあつたようだが、それによつ

て、特に土地の大人や子どもたちと親密になるということはなかつたようである。しかも、多くの場合、極度の飢えの状態にある彼らにとつて、土地の珍しい風物や自然に興味を持つ余裕などなかつたはずである。次に、縁故疎開の場合は、余程恵まれた環境にあつた疎開児童は別として、異物として土地に入り込まれた彼らは、土地の習俗や慣習に従うことには波々としていたと考えられる。特に、ことばの問題は大きかつたようで、『長い道』の主人公は、ある時期から土地のことばを使うようになるし、阿部牧郎の「袋叩きの土地」（一九六九年三月、「別冊文藝春秋」）でも、京都から東北に縁故疎開した主人公は、いじめに遭わないために無理して土地のことばを使用する。土地の習俗に迎合させられる屈辱感からは、「知識欲」など生じないのが道理なのである。

本稿で何度か引用した、ゆりはじめの『疎開の思想』には、「疎開は戦争という不幸な媒介があつたにせよ、都会と農村を直線的に結びつけようと失敗し、互いの反目のうちに離反してゆく過程を証したくなる」という指摘がある。かくして、各地に散らばつた学童たちとその土地の人々との関係は遮断された今まで終わつたのである。

### 三 非体験者の学童疎開小説

学童疎開体験のない若い世代による学童疎開小説は、今のところ、

ほとんど書かれていないようである。管見に入った小説に、乾ルカの短編小説「夏光」（一九〇〇六年五月、「オール読物」）があるので、取り上げたい。乾ルカは、一九七〇年生まれ、これまで見てきた学童疎開小説の代表作が書かれた一九六〇年代よりも後に生まれてきた作家で、もちろん戦争も疎開も体験していない。概略、次のような小説である。

主人公の梅沢哲彦は、父親が戦死し、大阪天王寺から瀬戸内海の村に疎開している国民学校五年の少年。疎開先の伯母の家では食事の度に気兼ねし、学校ではガキ大将とその取り巻きにいじめられている。唯一人の友人は、喬史。喬史は、兵役を拒否して憲兵に連行された父と、土地の者が祟りを恐れるスナメリの肉を妊娠中に食べた母を持つ子で、顔の左半分が黒い痣に覆われている。村人からも子どもたちからも忌み嫌われているが、自分の運命を甘受しているような少年である。また、喬史は、一種の超能力の持ち主で、左目に海蛍を宿していて、死期の近い人間を見ると青白く光つて見える。哲彦は、喬史の目に青い光が表ることで、自分が死ぬことを知る。空襲で天王寺の家が焼け、広島に移り住んでいた母親に会うために、喬史といっしょに夜陰にまぎれて汽車に乗り込み、早朝に広島に着く。時は、八月六日の七時十五分前。哲彦と喬史は走って母親のもとへ向う。

この小説は、ホラー仕立てで描かれた、少年の友情物語と読むことができるが、学童疎開と原爆という重いテーマが盛り込まれている。

母親がいるところが広島であることは、末尾の数行前まで伏せてあって（小説冒頭の母親の手紙には、元安川という川名が書かれているので、分る人には分るが）、原爆投下直前の広島の町を、それとは知らない二人の少年が駆けて行く最終場面は衝撃的である。喬史を超能力者に設定しているのに無理を感じないではないが<sup>(23)</sup>、広島駅を出て、すれ違う人々を見る。「喬史の左目は、今までにないほどに青白く発光していた」という箇所は、一時間半後に屍の街となる悲劇を暗示しており、超能力者という設定がそれを可能にしている。「夏光（なつひかり）」という題名そのものがすでに暗示的だが、この小説は、それが明示しないことによつて、原爆という大なる悲劇が、不吉な影のように読者の心に残る小説となつてゐる。

学童疎開は、原爆という大なる悲劇に至る前提として設定されている。哲彦は伯母の家に疎開しているので、もちろん縁故疎開である。伯母は悪気のある人物ではないが、自分の子どもたちの方が大事であるために、哲彦には食事を少なくする。哲彦は、敏感にそれを感じて、気兼ねしながら生活している。そのため、縁故疎開の小説の例に漏れず、集団疎開のような本当の飢えは体験しないが、常に空腹感に苛まれている。また、「疎開野郎」と言わせて、通学する学校のガキ大将から暴力をふるわれる日々を送る。土地の習俗を知らない哲彦は、スナメリの祟りなど信じることはできず、大人からも「わりや疎開の子じやけえ、この辺りのこたあよう知らんのじや。んじやが、昔からの

決まりごとを馬鹿にするような口は利かんほうがええ」と言われる。

ここには、突然に異郷に叩き込まれた縁故疎開学童の孤独感が示されている。しかし、喬史という友人の存在が、哲彦にとつての救いになる。哲彦と喬史は、土地の異端者であることによつて結ばれるのである。そして、この二人は土地の異端者であるがために、村を出る決意をすることになる。その結果、原爆の犠牲となることも知らないで。

学童疎開小説として見ると、物足りなさはある。実際に縁故疎開を

体験した柏原兵三の『長い道』や阿部牧郎の『袋叩きの土地』に見られるような、土地の撻に迎合しようとする屈辱感が描かれていないからである。「夏光」に描かれた縁故疎開からうかがえるのは、ある種の哀感である。この小説に漂つているのは、学童疎開の過酷な実態というよりも、母親と離れ離れで暮らすことになつた少年の哀感である。しかし、過酷な現実が描かれていないことは、この小説の疵とばかりは言えないだろう。学童疎開を描いた傑作として定評のある、今江祥智の童話『あのこ』（絵・宇野亜喜良、一九六六年四月、理論社）は、集団疎開（一九三二年一月生まれの今江は、集団疎開体験はないが、縁故疎開は体験している）を描いているが、やはり過酷な実態よりも哀感の方が色濃く漂う作品となつていて、なまじ悲惨さを悲惨に描くよりも、悲惨さを抑制した筆致で描かれることによつて、非学童疎開体験世代の者には、学童疎開のもたらす苦しみは、哀感をとおして伝わるだろうと思う。恐らく、「夏光」にも同じことが言えるのではないか

いだろうか。

奥泉光や古処誠二、福井晴敏など、戦争体験のない世代の作家による戦争小説が書かれている現在、学童疎開体験のない世代による学童疎開小説がもつと書かれるべきだろう。学童疎開体験者が、この先いなくなつても、戦時下の状況で、学童疎開という歴史的事実があつたというへ記憶▽が永遠に継承されていくためにも。文学には、へ想像力▽という大きな力があるのだから。

#### おわりに

最後に、再び、福島第一原発事故後のへ疎開▽あるいはへ避難▽と学童疎開の関わりについて触れて、稿を閉じたい。法務省の発表によると、二〇一一年の一年間で、人権侵犯事件が二万二千件あり、東日本大震災に関するものも二九件あつて、「福島県から避難した子どもが保育園の入園を断られたり、転校先で同級生にいじめられたりしたケースがあつた<sup>24</sup>」という。表面化した件数は少ないが、実際には、もつと件数は多いはずである。これらの人権侵犯事件は、言わば戦時下のへ縁故疎開▽者の異郷における孤立と事情が近いものだろう。もちろん、戦時下の状況と現在の状況は大きく違つており、全く同質のものと言えるわけではない。しかし、異質者を排除し、迫害する傾向は、今の社会でもなくなつたわけではない。戦時下の縁故疎開の悲惨さが

繰り返され、子どもたちの心の傷として残つてしまふ可能性は否定できな

いだろう。また、△集団疎開▽については、その後、実現に向けて進展しているという話は聞かないが、もしも、それが実現されたと

するならば、戦時下の集団疎開のように、特殊な状況に置かれた集団のもたらす悲惨が再現されないとも限らないだろう。

繰り返しになるが、戦時下と現在は状況が違つてゐるので、戦時下の学童疎開の悲惨さが、そのまま再現されると考えているわけではない。しかし、歴史的真実を知ることは、現在の状況を知るためにには不可欠であることは言うまでもない。今、学童疎開小説を読み直す意味はそこにある。さらには、現在の△避難▽と戦時下の△疎開▽を、それこそ△想像力▽で結び付けた、新たな学童疎開小説が出現することを期待したい。

〔注〕

- (1) 二〇一一年三月二七日の「朝日新聞」(大阪本社版)第一面トップの見出しには「集団疎開 住民に溝」とある。
- (2) 内藤幾次『同成社現代史叢書② 学童疎開』(二〇〇一年一二月、同成社)
- (3) 林美美子「放牧」、「作家の手帳」からの引用は、『林美美子全集』(一九七七年四月、文泉堂出版)に拠る。
- (4) 川本三郎『林美美子の昭和』(二〇〇三年二月、新書館)
- (5) この辺りの記述は、逸見勝亮『学童集団疎開史 子どもたちの戦闘配置』

(一九九八年八月、大月書店)を参照した。

(6) 板垣邦子『日米決戦下の格差と平等 銃後信州の食糧・疎開』(二〇〇八年一月、吉川弘文館)

(7) 小林信彦『一少年の観た△聖戦▽』(一九九五年五月、筑摩書房)。傍点は、著者が付したもの。以下、本稿で引用した小林信彦の文章に付された傍点は、著者自身によるものである。

(8) 後に、角川文庫(一九七五年一一月)。引用は、角川文庫版に拠った。

(9) 自伝的小説「流される」(二〇一一年三月、「文学界」)には、一九五四年頃、「一年ほど、私は東京の近県に集団疎開した時の体験を小説に書いていた」という叙述がある。ただし、『冬の神話』のもととなる小説を書き始めたのは、一九六四年からのことらしく、『小林信彦60年代日記』(一九八五年九月、白夜書房)の一九六四年三月一日の記述に、「夜中、「文芸」の小説のノートをつくる。集団疎開の話だ」とある。

(10) 逸見勝亮前掲書には、この事実が詳細に記述されている。

(11) 山田智彦「解説」(角川文庫『冬の神話』、一九七五年一一月)

(12) 坪内祐三「解説」(新潮文庫『東京少年』、二〇〇八年八月)

(13) この小説は、文芸誌「海」の当時の編集者・塙嘉彦の要請で、△想像力▽の小說を意識して書かれたという。ただし、小林信彦にとって、△想像力▽とは△喜劇的想像力▽のことを意味しているため、自分自身で失敗作と見なしたとも推測される。

(14) 実在の地名で言えば、「坂井港」は「境港」、「保田」は「法田」である。

(15) 高井有一『少年たちの戦場』(一九六八年五月、文藝春秋)。「後記」によると、作者が実際に集団疎開に参加したのは、昭和二十年一月末から三月末までの二ヶ月間だつたらしい。また、一九三三(昭和七)年四月生まれだから、五年生でなく六年生だつたはずで、小説では、微妙に学年もずらしてある。作者は、後に、昭和二十年六月に、秋田県仙北郡角館町に縁故疎開し、十一月に母の死にあい、翌月帰京している。また、父親は、昭和十八年八月に亡くしている。

『少年たちの戦場』は、一九九四年八月に、新装版が大空社から刊行された。引用は、新装版に拠つた。

(16) 小林信彦『セプテンバー・ソングのように 1946—1989』(一九八九年九月、弓立社)には、小林信彦自身の「1946夏休み日記」が掲載されていて、「敗戦直後がへとつもなく明るかつた▽証拠として、この日記を提出したい」と書かれている。

(17) ゆりはじめ『疎開の思想 里で聞いたは何の声』(一九九四年八月)

(18) 柏原兵三『長い道』(一九六九年一一月、講談社)、後に中公文庫(一九八九年九月)。引用は、中公文庫版に拠つた。

(19) ゆりはじめ前掲書

(20) 宮原昭夫『こつたがえしの時点』(一九六三年、七曜社)、後に毎日新聞社から復刊(一九七二年一月)された。引用は、復刊版に拠る。

(21) 奥田継夫『世界にも学童疎開があつた』(一九九〇年四月、日本機関誌出版センター)

(22) 引用は、『柳田國男全集23』(一九九〇年九月、ちくま文庫)に拠つた。

(23) この小説は、オール讀物新人賞(二〇〇六年五月、「オール讀物」)を取つた作品だが、選者の一人であつた桐野夏生は、選評で、「技巧」「手慣れの感」を認めながらも、「私はスナメリと喬史の挿話で、やや失望した。呪術的な挿話を入れたことによつて、喬史の造型が薄くなつた。喬史が運命に対して受動的に見えるのは、そのせいである。原爆を容認せず、抗う姿勢も見たかつた」と指摘している。

(24) 二〇一二年三月三日の「朝日新聞」(大阪本社版)の記事に拠る。

(人間生活学科)